可視光と

尾代余音

1

ディスプレイの中で黒いオフショルパーカーと格子柄のスカートを纏っている、トゥーンレンダリングのレイがぼくに向かって「お砂糖関係にならない？」と言ったとき、ぼくはちょうど、そろそろ彼女が距離を詰めてこようとしてくるに違いない、と確信したところだった。

ぼくが常駐しているワールドは転生系アニメによくある中世風の酒場みたいな空間で、低スペックのＰＣでも気軽に使えるようにするためか全体的にローポリなのだけど、その中でレイの姿だけはひどく精細に描画されていて、まるで常時彼女にピントが合っているみたいに浮き立って見える。本人曰く既存のキャラをパクったわけではなくＢｌｅｎｄｅｒで一からつくりあげたらしく、その割にはオリジナリティに欠けるけど、細部まで作り込んであって憧れるし、無料で配布されている素材を大雑把に手直ししただけの不出来なアバターを使っているぼくはとても恥ずかしくなる。

仮想空間を通じてレイと親しくなった一ヶ月前、彼女は自分がやりこんでいるＦＰＳによく誘ってくれていたけど、ぼくの反射神経が著しく低能だと判明してからは専ら駄弁りながら飲酒するようになっていた。シーズン制を採用しているゲームは継続しないとメタの変化についていけない、と言っていたのはレイ本人なのだけど、最近では明らかにぼくと二人きりで話し込んでいる時間が長引くようになり、一度その点について問い質してみたら「サキと一緒にいるのなんて夜だけでしょ。ランク報酬ぐらいだったら昼間だけでどうにでもなるし」と、いかにも社会不適合な答えが返ってきた。確かにぼくがログインする時間帯はある程度決まっているけど、そもそもログインしない日も多くて、なのにＶＲを起動させるとレイは毎回自ら作成したワールドに一人っきりで待機しているけど、彼女はぼくと違って自宅にいるからいちいちログアウトする必要がないだけで、それはぼくと来夏（らいか）が暇な日にＬＩＮＥ通話を繋げっぱなしにしているのと同じようなものだから、さほど不気味な話ではないのかもしれない。

最初はもっと大勢が行き交うワールドに参加していたのだけど、三次元と変わらない密度の群衆と、常連らしい特定のアバターばかりが身内ノリで喋っている空間に嫌気が差し、

ちょうどそのあたりでレイに誘われて一対一で話すようになったけど、現実での接点がまるでない二人の会話がそれほど盛り上がるわけもなく、大抵は彼女が垂れ流す、作画が良くて推せるアニメ会社とかアプリで読める無料マンガとかの紹介を一方的に傾聴していて、さすがにそれだけではつまらなさすぎると気付いたのか、レイは間を持たせるために積極的な自己開示を始めるようになった。それによるとレイはＶＲではアニメ調だけどリアルでは人間で、十八歳だけど三十五歳で、銀色の長髪だけどハゲかけていて、赤いアイシャドウをふんだんに活用しているけど化粧水すらつけたことがなくて、モノクロ基調で露出の多い服装にチョーカー付きの首輪を合わせているけど野暮ったいパーカーとジーンズに黒縁メガネを合わせていて、アイドルへのリアコを拗らせてストーキングしてそうだけど親に寄生している無職で、女だけど男だそうだ。そういった情報が明かされるたびにぼくは「はあ」とか「へえ」とか適当な相槌を打っていたけど、内心ではかなり引いていた……レイの向こう側にいる三次元の肉体に対してではなく、単に彼女の口の軽さに対して。彼女の明け透けな態度はぼくと真逆で、ぼくはＶＲで質の悪いアバターを使っているけど現実でも本当に質の悪い顔面をしているし、あらかじめ設定されたデフォルトの服装を着込んでいるけど本当に塗り潰されそうなくらい無個性なファッションセンスしか持ち合わせていないし、社会不適合者だけど本当に社会不適合者だし、サキという名前で女みたいな声をしているけど本当にサキという名前で女の身体をぶら下げていて、けれどそういうことは一切伝えていない。わざわざソフトを使って声を微妙に変えているのは、人間が出てくるたびに男だとか女だとか特定しようとする模範的連中の見下げ果てた根性に倦厭しているからでもあるけど、それ以上にＶＲは美少女の、男でも女でも、まして人間でもない美少女の拠りどころであるという暗黙の了解に迎合しているからに過ぎない。だからサキって本名を名乗る必要だってなかったはずなのだけど、最初の頃のぼくはどうかしていたし、当然今もどうかしているし、もしかしたら迎合よりも倦厭の気持ちの方が強いのかもしれなくて、自分ではよくわからなくて、まあどちらにしても、少し悔やんでいる。

　レイがレイと名乗るのはぼくと違って自分の身分をひた隠すためか、キャラクターになりきるためだったはずなのに、ある夜に泥酔していよいよナカモトユウキというフルネームをバラしてしまった瞬間、彼女はようやく自分の不用心を悟ったらしく、自棄っぱちな調子で「もうだめだ」と叫びだし、ぼくはそのとき初めて彼女の発言を心の底から面白いと思った。そんな五つ年下で一回り年上の存在と今日も三時間近く飲み続け、そのあいだレイは器用な手つきでぼくの頭を撫でていて、気取らない仕草がコミュ強の陽キャっぽい

のだけど、実際にはＶＲで定番のコミュニケーション方法に過ぎないらしく、そういえば初対面のときからそんな感じだった。新参が最初に無数のバ美肉集団に囲まれて愛でられるのは一種の洗礼で、現実の乾き具合に絶望している人間はすぐＶＲへ居場所の軸足を移してしまうらしく、ぼくは早々にレイとの個通に用途を制限したから沼には嵌まらずに済んだけど、他に懸念すべき問題があって、それは画面越しのレイが持っているぼくへの拘泥に他ならない。彼女は高性能なＰＣやコンデンサーマイクといった、充実したＶＲライフを送れる機材を全て揃え、手慣れた操作でアバターを自然に使いこなしているけど、コミュニケーションに慣れていないのは明らかで、だからこそぼくに対する執着が高まっていくのは当然とすら言えるし、むしろ彼女の情念に気付かなかったぼくの方がどう考えてもおかしくて、その原因は二次元の皮を被っているせいか、二ヶ月前に鬱病だと診断された前後から感性が鈍っているせいのどちらかだと推測できるけど、いずれぼくはレイが口を滑らせるのを嘲られるような身分ではないらしく、遅きに失した危機感はついさっき三本目の缶酎ハイを飲み干した瞬間に突然脳裏へやってきて、それとほぼ同じタイミングでレイがぼくに向かって「お砂糖関係にならない？」と言ったのだ。彼女はボイスチェンジャーも巧みに使いこなしているから、安物のヘッドホンから聞こえてくる女声もまろやかで鼓膜に優しかった。「サキ、聞いてる？」

「お砂糖」知っているくせに知らないような声音を出して時間を稼ぎ、レイへの対処法を思い浮かべようとしたけど、デジタルに変換されて跳ね返ってくる自分の声が妙に刺々しいのが気になり、もう少しピッチの調整が必要かもしれないと考えているうちに、更に時間が経っていたので「何それ」と継ぎ足した。

「あ……知らないか。そっか、そういえば意外とＶＲ歴浅いんだったよね……ああ……」どんなにつまらない話でも饒舌に語るレイがいかにもコミュ障っぽく言い淀み、「バーチャルだけで付き合うというか……リアルは関係なしに、ここだけで恋人同士になる感じ。リアルは関係なし」とたどたどしく言って、ぼくが黙ったままでいると、レイはもう一度「リアルは関係なし」と消え入るように呟いて、自信のなさが透けて見えるようで、人生で初めての告白だったとしか思えない。それから彼女はお砂糖の定義について懇切丁寧に説明してくれたけど、病んで以降スマホと向き合う時間が増えたからか、ぼくはどこかでその知識を仕入れていて、逆にＶＲで別れることを、お塩になる、と表現するのさえ知っている。

「リアル関係あるならいいよ」自然と来夏の顔を思い浮かべながら、ぼくはそう言った。

「レイ、近所に住んでたでしょ。今度飲みに行こうよ」「……いや」次はレイが黙り込む番になってしまって、きっと食い気味なぼくの態度に腰が引けたのだろう。「そういうのがないからこそ、お砂糖関係なわけで……」「だったら普通に付き合えばいい」「でも、そっちの趣味はないよ」「ぼくだってそっちの趣味はない」「じゃあなんで」「なんでも何も。人に告白するならそれぐらいの覚悟は欲しいし」

ぼくはレイと違ってゴーグルしか身につけていないから声以外の動作がどうしてもワンテンポ遅れてしまい、今も右手でマウスを操作して、時間をかけてサムズダウンの絵文字を宙空に表示させたけど、時間をかけすぎたせいで本気で怒っているみたいだった。お互いがアバターを被っているおかげで全ての言動に可愛げが付与され、実年齢が一回り上の相手にタメ口を利いても許されるのだけど、現実のぼくは左手で周囲をまさぐって四本目の缶酎ハイを引っ掴んでいて、ただの酒癖が悪い失礼なヤツでしかない。

「わかった」レイはＶＲ古参勢で、いかにも清楚系のヒロインみたいな純朴なトーンとアクセントを習得しており、ぼくも彼女の真似をすることでひとまず関西弁と敬語から脱却したのだけど、こちらの要求を呑んだ破れかぶれな早口は、アバターの後ろに隠れているオッサンを彷彿とさせた。「要するにリアルでも飲み仲間になるってことでしょ。ならそれでいいよ」

そのあとはぼくが今しがた開けた缶を空にするまで話し続けて、レイは告白そのものをなかったことにしたいみたいな調子で話題を逸らそうとしていたけど、ぼくの方からガンガンに詰めて詳細な日時と集合場所を三日後の午後六時、お互いの住所の中間付近に位置する駅の、改札を抜けた先と決めた。ＬＩＮＥのＩＤを教えるのは不安だったのでＤｉｓｃｏｒｄを介して連絡することにして（Ｄｉｓｃｏｒｄの登録には電話番号を必要としないから複垢の作成も転生も容易で、刹那的な人間関係の構築に役立つ）、ワールドから去るときには「来なかったら二度とログインしない」と一言脅迫しておくのも忘れなかった。

ログアウトしてすぐゴーグルを外すと一瞬の暗幕のあと、やけにギラギラした光が降ってきてネットカフェの鍵付き個室の風景が現れ、同時に消臭剤の匂いが鼻を刺し、空調が温風を吐きながら苦しそうに唸っているのが聞こえ、今の今までクッションに押さえつけられていた目の周囲が少し痛む。仮想空間では制限されていた五感が急に解放されると、途端に過敏になったかのような錯覚があっていつも心地が悪く、この落差にはいつまで経っても慣れない。部屋には窓がなく天井も低く、両側に防音壁が迫るようにそそり立っていて、規約では最大二人まで利用できることになっているけど、一人でも圧迫感を覚える

ほどには息苦しい。誰の目も気にせず妙にデカい機械を身につけていられるのが唯一の利点で、本音としては、扉の外で火事が起きたら逃げ場もなく悶え死んでしまうのだろうとか、余計な妄想をしてしまうほどには苦手だ。

自宅にはハイスペックなパソコンもヘッドマウントディスプレイもなく、だからぼくは近所のコンビニで適当に仕入れた飲食物を引っ提げて頻繁にここへ通い、機器を借りて仮想空間にログインしているけど、ネットカフェに置いてあるＶＲ機器の本来の用途は全天球カメラで撮影されたしょうもない映像の鑑賞なので、モーションコントローラーは用意されておらずゴーグルしかないし、あまつさえ設置されているパソコンは毎回データが消去されてしまうからいちいち始めるのが面倒だけど、必要なクライアントソフトは全部スマホに保存してあるから、ケーブルを繋いでインストールしてしまえばあとは割と楽で、機器の手入れも必要ないのだけど、その代わりぼくが手放しているあいだに、たぶんどこかのオッサンがＡＶを観るのに使っている。

林立している空き缶を次々とゴミ箱に放り込んで、少し濡れたカードキーとケーブルまみれのゴーグルをカゴに入れて部屋を出るとき、鼻で強く息を吸い込んだけど、一週間前の来夏の匂いは残っていないようだった。個室のドアが並ぶ通路にはささやかなオルゴールが流れていて、決して聴覚を責め立てられている気はしないけど、ぼくは全ての音から逃げたい一心で外套のポケットからワイヤレスイヤホンを取り出して装着し、ノイズキャンセリングを機能させたけど、レジで店員とやりとりして支払いを済ませないといけないと気付いて片耳だけ外し、そんな手際の悪さが本当にイヤになる。カウンター越しに立っている、憶えのある店員が自分のことを憶えていないよう祈りながら、キョドっていたレイの姿を取り留めなく考え続けているうち、ぼくはようやく、彼女と会う約束をした十二月二十五日が持つ特別な意味合いに思い当たった。

ぼくの誘いを承諾したレイの真意がどこにあるのかはよくわからないけど少なくとも彼女はぼくが纏っているアバターと、そこに宿っている仮想の人格に惚れ込んでしまっているらしい……そうやって、狼狽しているレイを冷静に観察しているように見せかけているぼくだって、彼女と話すだけを目的にネットカフェに通い、追加料金を支払ってゴーグルを借りていて、もはや累計の課金額は家に機材を揃えた方が安いぐらいにはなってしまっているはずで、やっぱりぼくの頭はまともに動かなくなっているみたいで、だからこそレイと会って、来夏と別れるための確実な口実を獲得しなくちゃいけない。

2

来夏はぼくの、紛れもない三次元の恋人で、四年前に付き合い始めたときは化粧っ気のない素朴な美人だったけど、アニメが原作のミュージカルに沼りだした頃からだんだんと感性が尖り始めて、今では水色のメッシュが入ったショートボブと太いアイラインというアンバランスなヘアメイクを気に入るようになってしまったけど、生来の体質と、徹底的に紫外線を回避することによってつくられた透き通った肌だけは一貫していて、そのおかげで彼女がどれだけ迷走しても大丈夫なほど正真正銘の美形だと証明されて、ぼくは先週、さっきまで使っていたのとまったく同じ鍵付き個室で彼女をレイプしたのだけど、正直に言ってそれはぼくがどうにかして彼女と別れようと思い詰めて計画した拙い手段に過ぎなかった。

別れようと思い立った理由は二つあって、一つは当然社会に出て秒で鬱病だと診断されて新卒カードとか福利厚生とか人生の正規ルートとかを手放してしまったせいで来夏を独り占めする資格を失ってしまったからだけど、それだけではないどころか、むしろもう一つの理由に比重を置きたいぐらいで、それはぼくが先月の誕生日で二十三歳になってしまったというどうしようもない事実にあって、二十三歳なんてもう立派な中年だし、こんなに生きるつもりなんて少しもなかったから、可及的速やかに死ななければならない。そういう約束をいつだったか、『リマインド』って名前の通い慣れたラブホテルで来夏と交わしたはずだけど、その頃ぼくは自分が中年になるまでに一端の何者かになると信じ込んでいて、来夏はそうやって信じ込むぼくを信じ込んでいて、なんなら今でも一方的に信じ込まれている節がある。そもそもスタート地点からしてミスっていたのかもしれなくて、ぼくと来夏が出会ったきっかけはぼくがネットに載せた小説を彼女が読んで、ついでに併記していたＴｗｉｔｔｅｒアカウントに熱烈なダイレクトメッセージを飛ばしてくれて、少し話して近所住みだと判明して、あとは若気の至りだった。ぼくの方は初っ端に小説なんていう一番恥ずかしいところを見られたのだから他に隠す部分なんてなかったし、来夏もぼくを一目で受け入れてくれて、だからぼくは運命なんて陳腐な単語の信者になってしまったのだけど、来夏が未だにぼくの小説を思い出して褒めそやしてくれるのを聞くと、心の表面がチリチリ痛む。ただただ思いの丈を吐露するためだけに下手な創作に手を出すなんてメンヘラどころか思春期を罹患した人間全員が通る道であるはずで、ぼくの小説だってその一貫に過ぎなかったし、来夏が当時の衝撃を流暢に語るたび、あれはね、てにをは

の使い方から間違ってるんだよって何度も力説しているけど彼女は聞く耳を持ってくれなくて、いつかプロの小説家になってね、なんて割と本気のトーンで言われたりもして、たぶん来夏の感覚は四年前からあんまり変わっていなくて、ぼくはそんな彼女を置き去りにして一人で勝手に病気になってしまった。

残念ながらぼくはそれっきり小説なんてものを書かなくなってしまったし、ここまでの人生ではそれ以外のまともな実績も解除できてないから明日グッチャグチャの死体になったってただの虚無だし、当然来夏を道連れにする資格なんかない。だからといって来夏を置き去りにして死ぬのは、それはそれで彼女の情緒が可哀想だから、せめてなんとか嫌われて憎まれて別れてから飛び降りようと考えて、まずは普通に『別れよう』とメッセージを送ったけど、『却下』と即レスされて失敗した。それまでもぼくは「別れよう」と来夏に言い過ぎていて、それは例えば彼女が好きで好きでたまらなくなった帰り道とか、会いたくて会いたくてたまらなくなった午前四時とかについつい出てしまったのだけど、来夏もそんなぼくの口汚さに慣れきってしまっていて、今回も本気だと思われなかったとしても仕方がないし、悪いことにぼくは「本気で別れよう」って言い回しだって何度も使っているから、ぼくには本気を伝える術がない。

次にぼくは文房具屋でカッターナイフを購入して手首をズタズタに裂いてから撮影し、来夏に何枚か送りつけた。死ぬつもりで切るなら包丁か彫刻刀の二択だけど、映えを気にするならカッターの方がよくて、切れ味が良すぎる刃物は少し手元が狂っただけで死んでしまうけど、市販の安いカッターならどれだけ強く切っても死にはしないし、切れ味が悪いおかげで傷口がガタガタになり、血の粒がいくつも浮くから表面を撫でるように刃先を沿わせただけでグロテスクに見える。こういう無駄な知識はメンヘラのあいだでは周知のライフハックで、傷痕が何年も残ってしまったり、錆びたカッターだと化膿してしまったりするという難点も共有されているのだけど、どうせすぐ死ぬなら些細な問題だ。

けど来夏はそれぐらいでは動じてくれず、不定期に写真を送るたびに彼女から返ってくるのはナガノのスタンプだけで、『大丈夫？』とも『ガチで引くわ、別れよ』とも言ってくれず、カラ館の個室で実際に見せつけても傷口に舌を這わせて乾いた血を舐めとるばかりだったのだけど、通院歴の有無こそあるものの、そもそも彼女だってぼくと似たり寄ったりのメンヘラだから、この手の脅しが通用する相手ではなかったのだ。

そういうぼくの愚行は来夏に対するあからさまな加害で、そう自覚していたけど、いや自覚していたからこそ、実際に追い詰められているのはぼくの方で、だから最終手段の覚

悟で一週間前、普段のデートみたいに一日潰してマンガを読む口実で彼女をネットカフェの鍵付き個室に誘い込んだのだった。普段は料金が安い半個室を使っていたから、来夏は不思議そうに店員との会話を聞いていたけどその場では何も言わず、初めて二人で入った個室はひどく狭くて少し身じろぐだけで腕同士が触れ合い、彼女は腰を下ろした途端に「狭ない？」と漏らした。「狭いね」「やっぱりいつもの部屋に変えてもらった方が……」ぼくは来夏の提案に対して論理的に反駁する手段を持っていなかったから、声も出さずに彼女の肩を強く掴んで迫ってしまっていて、彼女は即座にぼくが何をしようとしているか察していた。「いやだよ」「大丈夫、カメラついてないから」「やめて」「ぼく、死にたい」ぼくは来夏の好意がぼくだけに向けられていると、希死念慮が脅迫材料になる関係性だと確信していたから死にたいと言って、そう口にした途端に案の定彼女の抵抗は弱まった。それは言い訳のしようがないクズムーブで、誰かにバレたらこっぴどく非難されるのだろうけど、クズムーブはクズじゃないムーブよりも有効な場合が多々あるから世の中にいつまでも存在しているんだろうし、これまでもこれからも成功し続けて受け継がれていくだろうし、ぼくだって、来夏がセックスだけで死ぬのを思いとどまってくれるなら何度でも応じるだろう。

二人のあいだに置かれたチェーン付きの黒いバックパックとかカービィのストラップとかジルスチュアートの甘酸っぱい香水の匂いとかを押し退けて来夏を嗅ぎ、耳の下を撫でると水っぽい溜め息が漏れて、ぼくにはそれが舌打ちのように聞こえた。彼女がその場でのセックスに承諾してくれるところまでは見透かしていたけど、そのあとで、ぼくと別れてアパートに帰った来夏がふと我に返って自分が受けた仕打ちを思い出して、ぼくを見放してくれるか未知数だったし、それこそが問題で、だからぼくはレイプを完結させなければならなかった。

最初泣きそうだった来夏はやがて、少し唇を尖らせた面持ちに微笑みを宿らせて、それは手がつけられないほど暴れる赤ん坊に愛を注ぐ空想の母親みたいだったけど、ぼくが触れている低温やけどしそうな身体は、あくまでも仕方なく欲情を受け入れているという姿勢を崩さず、必要最低限の反応以外はほとんど示さなかった。来夏はぼくがいつでも彼女に発情できると考えているようで、それ自体はある意味でありがたいのだけど、実際にぼくの性欲はそこまで強くなくて、四年の付き合いの中では二人きりの空間で半ば義務的に行為へ及んだことだって何度もあるし、勝手な意見を言わせてもらえば、セックスの不在で機嫌を悪くするのはむしろ彼女の方だ。その日、ぼくは少しも興奮しておらず、本当は

セックスなんてしたくなくて、来夏への強引かつ丁寧な愛撫はぼくにとって尊厳の削りあいというか、肉を切らせて肉を切るというか、精神的な自傷行為に近かったのだけど、来夏にとってレイプであることに違いないからぼくの言い訳なんて聞いてもらう余地はないし、むしろそうであるからこそ彼女を粗雑に扱った事実が残るはずで、散々に痛めつけてようやく、ぼくは欲望の発散とは別の次元にある目的を達成させられると信じていた。

何度も身体を壁にぶつけ、苦労しながらもどうにか区切りまで持ち込めて、その頃にはもう一時間近く経過していて、最後は彼女もいつもみたいに荒い熱気を垂らしながらぼくの背中に手を回し、顔を背けてしがみついていたけど、単純に乱暴なぼくを視界に入れたくなかっただけかもしれない。ぼくは決して謝らないよう注意しながら、鼓膜にこびりついた彼女の嬌声を、不埒な色欲を押し付けるぼくを満足させるための演技だったと懸命に思い込もうとしていたけど、それは強姦魔が被害者の抵抗を都合良く解釈するのと同じようなものでしかなく、結果として警察に通報されたっておかしくなかったし、そういう破滅的な末路を望んでさえいて、たぶんぼくは独りの力で来夏と離れるのが難しいと薄々気付いていて、外側からの強制力が必要だと思い煩っていたのだろう。

幸か不幸か当然ながらと言うべきか残念ながらと言うべきか、来夏はぼくを見捨ててくれなくて、それどころか昨日ぼくは彼女に昼間から『リマインド』に誘われて果てしない性欲に付き合わされることになった。普通のセックスなら来夏のアパートでもよかった気がするけど、彼女からしてみれば普通ではなく、どこか仕返しめいた意図すらあったはずで、ぼくのそばで来夏は延々と日本語を忘れて喘ぎ続けながら治安の良い肌をいつも以上に蕩けさせていて、ぼくは液状化した来夏を貪り続けたせいで、快楽と疲労ですっかり憔悴してしまった。

そのあとに行った三百円均一の大衆居酒屋でぼくは「別れよう」と初めて声に出して言ったけどやっぱり「却下」と即答されて失敗してしまい、それからも来夏が嫌がるようなことを探しては言語化してみたのだけど、どれもほとんど効かなくて、彼女が一番イヤそうな顔をしたのはぼくが「優しいパパになって来夏の子どもを育てたい」と冗談を垂らしたときだった。来夏は周囲を見渡すように首を左右に細かく振り、ジョッキに残っていたハイボールを飲み干すふりをしたまま停止して何一つ返事をくれず、ぼくはぼくで動脈に鳥肌が立ったような心持ちになっていて、奥底から湧き上がる自虐めいた笑いを堪えるのに必死だった。テンプレじみた未来像が来夏を深々と刺してしまった理由は明らかで、それは彼女が幼いときに父親から洒落にならない虐待を受け、母親からは助けられるどころ

か痣だらけの身体を携帯で撮影されるような環境で育ってきたからで、そのせいで彼女は実の両親から引き離されて長らく児童養護施設で暮らし、高校卒業と同時に退所して、それからぼくと出会うまでの半年間どのように生活していたのかは絶対に教えてくれないのだけど、少なくともぼくと付き合い始めた時点での来夏は昼のバイトを転々としながら郊外のアパートで一人暮らしをしていた。ぼくはそういう経歴を知っていながら『優しいパパ』と軽率に言い出して、最低だけど、最低なのに、来夏は押し黙るだけだった。

あらかじめもっと物語を練り込んでおいて来夏を刺し続ければ突き放してもらえたのかもしれないけど、ぼくはぼくで父親がずっと家を空けている家庭で母親に殴られながら生きながらえてきたせいか二の句を継げなくて、気がつくとお互いにジョッキを持ったまま固まってしまっていて、長丁場のＶＲ飲み会みたいだな、みんな操作するのがめんどくさくなってアバターを放置するから画面が変化しなくなるんだよな、とか頭を巡らせていたら、来夏が口を開いて直近の推し活の報告を始めたので『優しいパパ』設定は雲散霧消した。

今のぼくは来夏に対して強く出ることができなくて、だからこそ後戻りできなくなるほど確固たるアリバイを手に入れなければならなくて、レイとのオフ会は、彼女を傷付けるのに有効な一打となるはずだ。実際に行動しなくてもそういう態の嘘をつけばいいだけだし、嘘を本当に仕立てるためだけにレイみたいな得体の知れない年上と会うのはどうかしてるし、会ったところで飲む以上の関係を構築するつもりもないのだけど、真っ赤過ぎる嘘をつこうとして無理をすると、ただでさえイカレてる情緒が跡形もなく吹き飛んでしまいそうで、そうならないためにもぼくは、事実という名の赤色を吸収して裏切りをある程度リアルなものにしておかないといけなくて、こんな風に思考回路を暴走させてしまうあたりがガチの患者である証拠で、やっぱりぼくには来夏と一緒にいる資格がない。

3

レイとの約束をスマホのカレンダーに登録しつつ寒風に逆らいながら日が変わる寸前の夜道を辿って実家兼自宅である六階建てマンションの一〇三号室に帰ると、鍵は開きっぱなしなのに母の姿は見当たらず、苛立ち紛れに咳き込みながら再び外に出て、反射的に振り返り視線を上げると曖昧な街灯の光の向こう側、五階の通路から母が右半身を乗り出して停止していた。ぼくは脱力しながら三十秒ほどじっと見つめていて、そのあいだに飛び

降りるチャンスなんて無限にあったのだけど、母はいつも通り手摺りにしがみついて動かず、なんだか羽化しようとしているセミの幼虫を観察しているみたいに思えてきてせせら笑いそうになり、軽く頬を平手で打って気合いを入れ直して、あくまでも切羽詰まっているような声で「マリさん！」と叫び、エレベーターに駆け込んだ。五階に到着するまでにも十分に猶予はあり、母の動向はわからないのだからもっと焦るべきなのだろうけど、ぼくは彼女が少しも動かずに固まっていると信じて疑っていなかったから頭の中は余裕まみれで、開いた扉から駆けつけると実際に母は固まったままだった。彼女は灰色のスウェットの上に水色とピンク色と黄色の蛍光ペンをぶちまけたような、ド派手なブルゾンを纏っていて、ビビッドな色合いの服を好む傾向は昔から一貫しているから、一緒に歩くのがいくつになっても恥ずかしい。

太ましい肩に手をかけると母は自我を脳味噌に入れ直したようにビクリと身震いして、ぼくの助けを借りずに独力でこちら側に戻ってきたけど、足取りは頼りなくふらついていて、薬を飲んで布団に入ったけど眠れずに這い出てお決まりの死に真似に走ったのだろう、と容易に予測できてしまう自分に冷めてしまう。下手くそな俳優みたいに「こんなことしたらあかんよ、マリさん」と棒読みで言うと母は遮るように盛大にしゃくり上げ、ぼくは自分の失言に気付き、フラストレーションを溜めながら一から言い直した。「……こんなことしたらあかんよ、お母さん」

マリは母の名前で、ぼくだって物心ついたばかりの時期は普通に「お母さん」と呼んでいたのだけど、小学校低学年のときに「あたしはお母さんやない。ちゃんと名前がある」と頬を思い切り捻られながら怒鳴られたので、以来「マリさん」と呼ぶようにして十年以上経つのだけど、最近では「なんであたしのこと、お母さんって呼んでくれへんの。家族やと思ってくれてないの」と泣きつかれるようになった。だからといっていきなり呼び名を矯正するのは難しくて、ぼくは何度も母をマリさん呼ばわりしてしまい、悲しい顔をされるから、一度だけ名前で呼ぶようになった事情を説明したけど母は当然のように憶えておらず、逆に「なんで嘘つくの」と余計な逆鱗に触れてしまった。それだけじゃなく、母はぼくを散々に殴っていた過去すら「あたしがそんなことするわけない」と一蹴するようになっていて、さすがに許せなくなったぼくが否定のつもりで大きく手を振ると指先が彼女の肩へ僅かに触れてしまって、その途端に母は本物の涙を流しながら「叩かんといてえ、叩かんといてえ」とぼくに絶叫し始めたから、彼女の中では殴られた経験こそあるものの殴った経験は皆無ということになっている。母が初めてメンクリに行ったのは十年前あた

りだけど、当時誰もぼくに詳しい病名を教えてくれなかったし、今だってはっきりとは知らされていなくて、診断されたあとも楽しそうに殴ったり蹴ったりしていたのが、ぼくが高校に通い始めたあたりで急に気力を萎えさせて、ひたすらプチ家出と死に真似を繰り返すようになった経緯と、盗み見たお薬手帳のリストから、たぶん双極性障害なのだろうと推測している。

突発的な行動を起こさないように母の手首を掴んでエレベーターを出て一〇三号室へ戻ると、サンダルを脱いだ途端に彼女はそそくさと、機械みたいな歩調で寝室に帰っていき、ぼくは漠然とした心持ちでその背中を見送ってから、自分の部屋で入浴の準備をする。母が抱えていた、今夜の分の自己顕示欲はすっかり解消されたと確信しているから、明日まで目を離していても大丈夫なはずだと、ぼくは冷静に計算していて、いつも手間をかけさせる母への苛立ちのようなものはとっくの昔に消えているし、どちらかと言えば考え続ける方がストレスだから、すっきりと忘れてしまいたいのだけど、母の目的がぼくに忘れさせないことである以上、無意味な願いでしかないのだろう。

暴力を振るう母と死に真似を繰り返す母は表皮以外別人のように思えるのだけど、一つだけどうしても見過ごせない共通点があって、それは彼女がどこまでも狡猾であることで、ぼくに手を上げるとき、母はいつだって見える場所に傷痕が残らないように気を配っていたのだけど、動機としては証拠の隠蔽より自己暗示的な意味合いが強かったように思う。ぼくの腕とかに内出血を見つけると母は、殴っている最中でも急にテンションを切り替えて患部を淑やかにさすりながら「あんまり危ないことはしたらあかんよ」と猫なで声で言っていて、そんな彼女の高低差は当時のぼくにとって恐怖以外の何ものでもなかったのだけど、何度も言い含められると、だんだん本当に自分のミスで怪我してしまったと認識してしまう程度には洗脳効果があったけど、今噛み締めたところで怒りと諦めの種にしかならない。

加虐から自虐に転身した母もやはり狡猾で、ぼくだけに見つかる場所でしか死のうとしなくて、五階の通路は数年前から飛び降りるふりを演じる定位置になったのだけど、それだって彼女が、そこがマンションの中で一番人気がなく、ぼくに気付かれるまで際限なく死のうとすることができるポイントだと学習してしまったからで、同じように、首吊りの真似をするときはぼくの部屋のドアノブに、少し大きな輪をつくったネクタイを引っかけて緩く首を絞めるし、失踪したときでも最寄り駅までの道のりで必ず探し出せる。そのせいでもはや母の自殺を止めるのはぼくにとってソシャゲのデイリークエストを消化するの

と同じぐらい、ただただ時間を無駄にするとわかりきっているのに達成しなければならない、義務感に追われるだけの簡単で面倒な作業に成り果てていた。

無為に母を毒づいているうち、ぼくはいつの間にか入浴を終えて寝間着に袖を通していて、以前に「風呂入ってるときって記憶飛ぶよな。毎回ワンパターンすぎる」と来夏に話したら「そこの自意識は守っといてや」と笑いながら苦言を呈されたのを思い出した。バスタオルで乱雑に頭上をかき混ぜてから洗面所を出ると、今になって全身に汗が滲み始めて、自律神経に嫌がらせをされているようだった。忍び足で廊下を進んでゆっくりとリビングに行き着き、開けっぱなしの扉へ注意を向けると二つあるシングルベッドの奥側で母が腹立たしいほど平和な寝息をたてていて、ぼくは改めて、嗜虐心にも似た鬱屈を心に宿す。この家は母にとって安寧の空間なのかもしれないけど、ぼくにとってはそこかしこにトラウマがこびりついていて、今歩いてきた廊下は蹴り転がされた廊下で、よく見ると少しへこんでいる壁は投げ飛ばされたときに首をぶつけて捻挫した壁で、母が潜り込んでいる掛け布団のカバーは、まだ彼女の失踪に慣れていなかった頃のぼくが、どこにも見当たらない母を探してパニクって、犬みたいに匂いを嗅ぎあてて号泣しながら抱き締めたカバーだ。

寝室から目を外してリビングを見渡すと暗がりに溶けた四人掛けのダイニングテーブルがあって、上には何も載っておらず、初めから据え付けられた部品であるかのように無機質だけど、それこそが最もぼくの古傷を抉ろうとしてくる。母は料理が苦手だったから食卓にはいつもインスタントと冷凍食品が並んでいて、ぼくは幼い頃からすっかり慣れてしまっていたのだけど、月に一回ぐらいの頻度で単身赴任先から戻ってくる父の方が先に耐えられなくなってしまい、やがて家に家事代行スタッフが来るようになった。母と同い年ぐらいの女性がたった三時間で一週間分の、健康的でバラエティ豊かな献立を手際よくつくりあげ、容器に詰め込んで帰っていく。夕食のテーブルに並べられた色鮮やかなメニューを、ぼくは冷食と似たテンションで平らげていたはずなんだけど、母の目にはぼくが大層喜んでいるように映っていたようで、彼女は満足げみたいな表情が憎たらしくて仕方なかったらしく、時折箸を投げつけられては「感謝されるしか能のない人になるよ」と説教されたのだった。「ああいう連中は、ありがとうって言われるのが嬉しいとか笑顔が嬉しいとか、さっきもそう言うて帰ってったけど、そんなんまともに稼がれへん無能を誤魔化してるだけや。情けない。あんた、そうはなりたあないやろ。今の時代、勉強せえへんかったら他人のトイレの世話するような仕事せなあかんかもしらんのやで。せやのにあんた

はいつまでだらだらメシ食うてるんや」以降も彼女は、まるで自分がそうなってしまうのを怖がっているかのようにたびたび同じフレーズを吠えるように繰り返し、ぼくは理路不明の怒号を避けるように身を縮こまらせながら、美味しかったはずの料理をかきこんでいた。

一度も働かずにお見合いで父と結婚した母の意識は浮世離れと呼べるほど高騰していて、人生には確固たる成功ルートがあって自分の遺伝子がその道を進めると信じ込んでいたからぼくに分不相応な期待をかけていて、偏差値の高い私立中学に通わせようと散々に努力していたらしいのだけど、その努力も評判の良い参考書を買い与えたり大人になってからのビジョンを明確に示したり、といった具体的なものではなくてＳＮＳで中受ママ勢を名乗って界隈の同類と馴れ合ったりブログに顔を隠したぼくの写真を無数にアップロードして熱心な自分をアピールしたり、といった子どもをダシに承認欲求を満たす感じだったから完全にベクトルを誤っていた。当然成績なんて微塵も上がるはずがなかったのだけど、母はテストのたびに何が悪いのか本当にわかっていないような表情でヒステリックに泣き喚くばかりで、子どもの教育方針に興味なんかなかった父はひたすら関わらないようにしていて、ぼくだけに皺寄せが来て、それでも何かの拍子で私立中学に合格していたらまだ良かったのだけど、実際には鬱期に入った母が教育そのものへの熱意を失ってしまったためにぼくは受験すらしていなくて、結局は高校までを公立で過ごしたあと、私立の微妙な四大へ進学してモラトリアムを延期させるだけになってしまった（母のネット活動を知ったのは大学に入学してからで、自室でスマホを弄っていたぼくは母の、顔文字だらけのブログがイタいサイトとして晒し上げられているのをたまたま発見して、そこに載せられている写真の子どもが自分自身だと特定するのはあまりにも容易だったから、思わず母に詰め寄ろうとして部屋を飛び出しリビングへ向かったのだけど、彼女はいつもみたいに何をするでもなくカーペットに横たわってテレビ台と床の隙間を半目で見つめていて、ぼくは手元に映るハイテンションな文面と、次第に太りだしていた母の寝姿を見比べることしかできなかった）。

隅っこに転がっているくすみピンクのトートバッグをそっと拾いあげながら、記憶に格納されている悪い思い出を洗い浚い全身にぶちまけて、これから自分がする行動を正当化しようと試みるけど、想いとは裏腹に罪悪感ばかりが募って上手くいかなくて、それはきっと言い訳そのものが色褪せたルーティンになってしまっているからなのだろう。手を突っ込んで取りだした長財布のジッパーを、音を立てずに開ける方法を学習してしまってい

るから犯行に注力する必要はなくて、手際よく事を運びながら過去の自分を慰撫して、現在の母を責める材料をいくつも見つけ出せるけど、どうせぼくも病んでいるし、精神病患者同士の喧嘩なんて想像するだけで怖気が走るもので、それでもぼくはエゴまみれの被害者意識を捨てられないから、直接ではなく間接的に危害を与えようとしていて、札入れを覗くと中にはいつも通り万札が複数入っていて、昨日見たときよりも何枚か増えているようで、ぼくは素早く一枚摘まみ上げたあと、逡巡してからもう一枚取って元に戻した。

自殺企図に関してのみ知恵を絞る母は、逆に言えばそれ以外の人格をとっくに手放していて、特に家事代行への依頼を料理だけでなく掃除や洗濯、買い物にまで拡大させてからは存在意義すら維持できずにどんどん生活能力を衰えさせてしまい、そんな母の財布から、彼女が死のうとするのを止めるたびに報酬として万札を抜き取るのは殊の外簡単な作業だった。母は贅沢ではなくお金そのものに執着していて、金銭管理の権限を絶対に譲ろうとしないのだけど、家計簿をつけるだけの集中力なんて最初から持ち合わせていなくて実質的には管理なんてしていないから、万札が一枚消えているぐらいでは異変に気付かなくて、中身が寂しくなると、たとえ使った憶えがなくても近所のコンビニのＡＴＭで預金を下ろしているらしく、彼女にとって重要なのは金の使い道ではなく、財布が物理的に膨らんでいることであるようだった。

母の放漫とぼくの悪意が許されるのは、建築関係の男社会で生きながらえている、昔ながらのワーカーホリックである父が家庭を顧みずに働き詰めているおかげで、彼は精神的な病を正確に直視できないタイプの人間だから、母が人間をやり抜けないほど疲弊している事実を認めていなくて、母が病んでも赴任先から帰ってくる頻度を少しも増やさなかったし、今なお彼女がきちんと口座を守っていると信じていて、おそらく、悠々自適な老後さえも夢見ているに違いない。父は母を刹那的にでも愛していたはずで、だからこそぼくがここに生きてしまっているはずなんだけど、ぼくが生まれたあとの父にとって唯一にして最大の問題は仕事であって、母はあくまでも付属物でしかないようで、物として見ているからこそ現在の母の生態をちゃんと把握できていないらしく、そういう性向だから、ぼくが社会に敗れて実家に寄生することを希望したときも、父はつくづくぼくの敗因が理解できないようだった。そのときも父は単身赴任先の社宅にいて、ぼくは電話越しでしか心情を知れなかったのだけど、彼は叱責と嘆息の混じった溜め息を連発したあとに「することもないんやから母さんの面倒でも見とけ」と言って、受話器の向こうにいるぼくが小さく首肯したのを見透かしたように「どうせお前と同じようなもんなんやろ。せやからって、

いつまでも家におったらあかんぞ」と捲したてた。ぼくには一連の命令が、家族に向き合った結果捻り出されたというよりは、仕事上のトラブルをその場しのぎで解決しているようにしか聞こえなかったし、もっと言えば、ぼくと母という二つの歪なパズルピースを力尽くで嵌め込んだだけのようであったのだけど、あれから父とは一度も顔を合わせていないから真意はわからないし、わかりたくない。

自室に戻って慎重に扉の鍵をかけてから、握りしめていた二万円を自分の財布にねじこむとき、ぼくはコンビニのＡＴＭで入金手続きする自分を思い浮かべていて、明日には寸分違わぬ行為を実践するはずで、ぼくの口座は盗み取った母の金とか学生時代のバイトでできた僅かな貯蓄とか最後に受け取った給料とか寸志とかが混ざり合って濁りきっている。

スマホを手にベッドへ身を投げるとシーツの感触が存外心地よくて、きっとそれは顔も知らないスタッフのおかげで、ぼくが社会に出ているあいだ、母は家事代行サービスにぼくの部屋も掃除させるようになって、帰ってきてから拒絶しても受け入れようとしないし強く言うと暴れだしてしまい、それが潔癖症めいた習慣なのか支配欲の片鱗なのかはっきりとはしないけど、いずれぼくは室内にあまり物を置かなくなったし、そもそも自室に籠もっているのが一層落ち着かなくなってしまった。だから毎日のように来夏に会うかネットカフェに通うかで実家を留守にしているのだけど、ぼくはぼくの逃避が母の情緒にもポジティブな影響を与えると信じていて、実際に母はぼくが家賃補助付きのアパートから通勤していた半年間、ケアマネージャーの助けを借りながらも一人で住んでいて、死ななかったのだ。それでもぼくは父が厳命した実家への寄生の条件を表向きには遵守していて、本当は父を説得できればいいのだけど、ぼくがどれだけ死ぬつもりがない死に真似を目撃したところで母が絶対に死なないとは言い切れず、もし万が一のことがあった場合に責められるのがぼくであるのは間違いなかった。

慣れたソシャゲのアイコンをタップして起動するまで待って、甲高いアニメ声を浴びながらアプデ情報とかログインボーナスとかの通知をおざなりに見送ったあと、すぐさまガチャの画面に遷移させたら、一瞬動作が重くなってスマホがブラックアウトし、気の抜けたぼくのゴミ顔面が映った。ピックアップガチャではない通常ガチャを選んで十連を回したら、もったいぶった空白のあとに煌びやかなエフェクトが弾けてＳＳＲのキャラが当たったと教えてくれたけど、音と光で刺戟された心はその実、一つも喜んでいなくて、実装されているキャラで欲しいのは全部コンプリートしているから心が弾まないのは当たり前なのだけど、実利的なメリットを考えず取り憑かれたようにもう一度十連を回そうとした

ら石不足の警告と購入案内の画面がポップして、迷わず一万円分を買って無表情で連打して、ぼくのもとに招かれて歓喜しているキャラのボイスが脳の表面を上滑りしていく。

このゲームを始めたのは二年ぐらい前で、来夏に勧められたのがきっかけだったけど、彼女の方はずいぶん前からログイン勢になってしまっていて、ぼくの方は逆に、当初はあまりのめり込んでいなかったのだけど、会社を辞めるかどうかの瀬戸際になったタイミングで初めてリアルマネーを使ってからすっかり重課金勢に進化してしまった。それはちょうどぼくが母の財布から万札を抜き取り始めた時期と重なるのだけど、ゲームのために盗むようになったというよりは盗んだ金の使い道を見つけたというのが正しい気がする。ぼくは母の所持金を少しでも減らしてやりたいと思っていたけど、その金で自分が裕福になりたいとは思えなかったから、ソシャゲに貢ぐようになったのは単純ななりゆきで、ギャンブルに手を出していた可能性だって否定できない。

ガチャは人間の射幸心を煽るため精巧に仕組まれているらしく、回しているあいだは妙な陶酔を覚えるけど、表示される結果の不発を認知してしまった瞬間に興奮以上の空虚に包まれて、それを忘れるためにまた回そうとしてしまうから、確かによくできているのかもしれないけど、延々と続く徒労感に身を浸すという点では、母の死に真似を止めにかかるのと同じく、穴を掘って埋めるだけの簡単な刑罰に似ているような気がして、ぼくはいつの間にか単調な絶望の虜になってしまっているのだろうか。親と縁を切りたいし切らなければいけないんだろうけど、実際は内心でじくじく考え続けるばかりで、たとえば母が病んでいない世界線を理想郷みたいに思い浮かべたりもするのだけど、そのような素晴らしい世界で生きているぼくの姿が想像できない。精神病は遺伝しやすいっていう研究結果があったはずで、ぼくは自分が病んだときにそういうデータを必死に検索したのだけど、本当だろうと嘘だろうと一〇三号室に精神病の親子が同居している事実は何も変わらなくて、でも何かしらそれっぽい理由があるとぼくは安心してしまうし、母を呪うことさえ正しくなるような気がする。

母に対して早く死んでほしいなんて思うのは不謹慎だからできるだけ考えないようにしているけど、何もせず許してしまえるかといえばそんなことはなくて、せめて死に場所だけでも奪いたいから、ぼくが死ぬときはこのマンションの五階から飛び降りると決めている。五階からだと確実に死ねるか怪しいのだけど、下はアスファルトだから頭から落ちればいけるはずだし、もし無理だったとしても先を越せた成果は残るはずだし、朦朧とした母にだってさすがに痛みを与えられるはずだ。父はそのときになって初めて妻子の事情と

か預金額の少なさとかに気付くのかもしれないし、或いはもっと前の時点でたまたま気付く機会があって、死よりはマシな破綻が訪れるのかもしれないけど、現段階のぼくにそのへんの顛末を見通すのは難しすぎる。

そんなダサい勇気を一から説明したら来夏は心から泣いて同情してくれて無職のぼくを受け入れてくれるかもしれなくて、でも彼女はきっと何もなくたってぼくのためなら心から泣いて同情してくれると思う。いつだって来夏の情緒はふわついているように見えるけど、実際にはぼくとさして変わらずヘラってるはずで、ぼくは彼女に格好悪いところを晒さないまま一方的に守っていたくて、だからぼくは自分が本格的な鬱病になったことも、仕事を辞めたことさえも伝えられていない。ぼくが一人暮らしを始めたと知って、来夏は何度かぼくが住んでいたアパートに来たがったのだけど、「会社の人に見つかったら色々めんどくさそうだから、落ち着いてからな」と言ったらすんなりと納得してくれて、そのときは本当に色々めんどくさそうだと思っていたのだし、今となってはちょうどいい案配の嘘として機能してくれているけど、そういう言葉の賞味期限はどれぐらいなのだろう。

気に入っているキャラクターの立ち絵をしばらく脳に浴びせてから入眠用の薬を飲み、電気を消したけど、なかなか眠気が来てくれなくて、ようやく夢の世界に入りかけたのに来夏ではなくレイがちらついて、芋づる式にネットカフェの景色とか匂いとか缶の冷たさとかが引き出されて、それらを全部追いやるまでに相当時間がかかった。

4

レイと会うまでの三日のうち少なくとも二日は来夏と過ごす予定だったけど急遽彼女のシフトがパンパンになってしまったため一度も会えず、正確には一回だけ昼ご飯を一緒に食べたけど、そんなの会ったうちに入らないし、かといって空き時間で仮想空間にログインするのも負けたような気になるから、意地でもゴーグルを身につけないよう心に決めて、ぼくは朝から家を出てネットカフェでマンガを読むでもなく何時間も寝そべっていたり、次々とよぎっていくショート動画の大群を見たり、予約もなしにメンクリを訪れて頓服薬の獲得に成功したりして三日間を乗り切り、夜中には死のうとしている母を二度救い出して万札を三枚抜き取った。

それまで健全な昼職のバイトを何度も乗り換えていた来夏は半年前からオタクスポットの端っこにあるコンカフェで働き始めて、最初は「好きが就職したから、うちもちゃんと

稼ぐねん」と豪語していたのだけど（来夏はぼくを『好き』と呼んでいて、遠回しな表現がわからないぼくはすごく助かっている）、酔い潰れた午前三時に問い詰めてみたら、本当の理由は箱推ししていた二次元アイドルグループに費やすお金が枯渇して困っていたときに、いつの間にかできていた消費者金融での借金を処理するためだった。聞いたかぎり彼女が借りていたのはごくごく小額で、一ヶ月も働けば完済できるレベルだったし、なんならぼくが受け取っていた給料の、ささやかな余力でどうにかなるはずだったけど、彼女は業者からは借りてもぼくからは借りてくれなかったし、借金がなくなってからも働き続けている。

ぼく以外の誰かに媚びを売っている来夏なんて見たくなかったから、彼女が働いている姿に立ち会ったことはないけど、一度だけ我慢できなくなって前を通りすがったことがあって、そのコンカフェは雑居ビルの一階に店を構えていて、来夏の姿は見当たらず、代わりに目についたのは入り口付近に置かれている、縁が錆びている安っぽいスタンド看板と、そこにライムグリーンの丸文字で記されている店名だった。それらの佇まいを見たとき、ぼくの頭に何故か反社の二文字が思い浮かんだけど、本当に反社かどうかは確認しようがなく、少なくともキャバクラみたいなアフターとか同伴とかのいかがわしい制度はないようだけど、キャストに対する罰則はとても理に適っているとは言えないほど厳しくて、たとえば遅刻したキャストには時間にかかわらず三万円の罰金が科せられ、それこそがぼくと来夏が会えなくなった理由だった。罰金と言ってもその場で万札のやりとりがあるわけではなく、三万円分償い終えるまで一時的に給料が減らされるそうで、言葉も罰金ではなくペナルティと言い換えられている。そういう裏技を使えばエグい仕打ちも許されると来夏は言っていたけど確信していたわけではないようだったし、ぼくも検索してみたけど確たる答えが出てこなくて、インターネットなんてちっとも役に立たないほど世の中の難易度は高い。店で働いている面々の中でも来夏は人気がある方らしいけど、起床が下手なタイプだからしょっちゅうこの規則に引っかかってしまい、挽回するためにシフトを詰め込むのを繰り返している。来夏は自分ルールで一ヶ月に稼ぐ金を几帳面に決めていて、その額は彼女の生活を鑑みれば過大に思えるのだけど、少しアドバイスするぐらいでは聞いてくれないし、真剣に相談するタイミングを逃し続けているうち、遂にぼくは失職してしまい、彼女の労働に口出しする権利を喪失してしまった。

「めちゃくちゃ怒られたねんな」三日間で唯一顔を合わせたサブウェイで来夏はぼくに謝罪しつつ、海老アボカドのサンドイッチを囓りつつ、職場の愚痴を吐いていた。「店長

に？」ぼくはダイエットとか適当な理由をつけて何も食べず、マスクの隙間にストローを差し込んでアイスコーヒーを飲んでいた。「ちゃう、後輩に」「ああ、シフトの件で」「ちゃう、メンヘラって言われて傷付く人もいるんですよ……って」「……メンヘラって言ったん」「あれ、うちがミスしたときにいつも『メンヘラなんで、すみません』って言ってる話、してなかったっけ」

来夏の話題はあっちこっちに飛び跳ねるせいでこちらから掘り起こさないと何を言っているのか掴みきれず、付き合い始めた頃に少しだけ文句をつけたのだけど、当時美容脱毛を始めたばかりだった彼女に「腋と違って脳のメンテはできへんねんな」と開き直りみたいな返事をされて以来、改善の気配すらない。

「せやけど、うちからメンヘラの称号取ったら、何も残らんくない？」

あっけらかんとそう言い放った来夏は、出勤前だからデートのときよりも化粧を薄くしていて、「好みの格好じゃなくて好まれる格好。これ。これができるだけでまあまあ勝てる」と以前に得意気に語っていたけど、客ではなく恋人として、素顔に近い彼女を拝める貴重な機会だから、ぼくは来夏の容貌を堪能していて、そのせいでセリフに反応するのを忘れていた。

コンカフェはコンセプトカフェの略だから当然キャストは様々なコスプレをして接客していて、来夏は勤め始めた頃から一貫して女神の衣装とキャラを貫いているらしい。一度だけ自撮りを見せてもらったのだけどドンキで売っているような白くて安っぽくてペラペラのワンピースを着ていて、頭にはリングと一体になったカチューシャをつけていて、女神というよりは天使にしか見えなくて、申し訳程度の羽根が背後から少しのぞいて、衣装自体はノースリーブなうえにミニスカートだったのだけど、ニーハイソックスとアームカバーのおかげで肌はほとんど露出していなかったから、ギリギリ嫉妬を爆発させずに済んだのだけど、普通に吐きそうにはなったのでそれっきり見ていないし、事あるごとに思い出してネガってしまって、その日のサブウェイの客席でも克明に蘇ってしまって、不機嫌にならないように脳味噌を捻転させていたら、来夏が神様への信仰を告白した昔日まで漕ぎ着いた。

信心深い性格は令和でもノーマルなはずなんだけど、来夏が信じているのはオリジナルの神で、その事実を付け足すだけで彼女がめちゃくちゃイタい存在になってしまう。ただし独自の礼拝方法とか教典とかがあるわけではなく、そもそも明確に神の設定を作り込んでいるわけでもなく、彼女はただ寝る前に死んだあとのことを考えるのが怖いから自分な

りの死後の世界を想定しているというだけの話なのだけど、そういう誰でも持っている観念に躊躇なく神と名付けてしまうあたり、やっぱりイタくて可愛い。

「意識はハッシュタグやねんよ」と呟いた来夏の、唇の動きだけが印象に残っていて、そこがどこだったのか思い出せない。「なんか魂みたいなんがな、別の人とか動物とかに移ってもな、たぶんうちら自覚できへんと思うねん。魂の上に来夏っていうタグがついてあって、うちはそれを自分自身だと感じてるんよ。わかる？」「わからん」「わかって。それでな、死ぬやん？　そしたら魂がどっかに行くんやけど、いつかここに戻ってくると思うねんな。で、もっかい魂におんなじタグがつけ直されて、うちはうちになるわけ。せやから本当は、うちの前世はうちで、うちの来世はうちやねんな」「その場合、神様は誰になるん」「わからん。あえて言えば、好きやな」

そのときは冗談ではなくて来夏の言っていることが本当にわかっていなかったのだけど、だからといってすぐに否定するつもりにはなれず、ぼくは頑張って自分の知識と照らし合わせてみて、そうしたら来夏の主張はあながち間違いでもないかもしれないと思い始めていた。

確か宇宙は永遠に膨張と収縮を繰り返しているみたいな理論があって、なんでぼくはそんなことを知っているのだろうと記憶を辿ったら、そういえばぼくが書いて来夏に読んでもらえた小説は、宇宙と少女に関する物語だった。数千万光年離れた恒星系に巨大な砲台があって、普段は惑星を偽装しているけどある日に突然起動して砲塔を展開し、地球に向かって『圧縮された宇宙』が込められた弾丸を発射して、その膨大なエネルギーのおかげで超遠距離を航行できたのだけど、それでも着弾する頃にはずいぶんと勢いを失ってしまっていたから、地球の表面にある高層マンションから飛び降り自殺しようとしている少女しか撃ち抜けなかったのだけど、彼女にしてみれば自分だけが救われたと、自分のためだけに光線が放たれて殺してくれたと思い込めたからめでたしめでたし、という話で、タイトルは『生存限界（プラネタリーバウンダリー）』だった。思い返すだけで頭が痛くなるし、特に『圧縮された宇宙』のくだりがまったく意味不明なんだけど、パクり元はその宇宙論だったのだろう。メンヘラは自分の意識と宇宙や世界の価値を等号で結びつける癖があるから、たぶん当時はそういうメタファーを意図していたのだろうし、だからこそ同類である来夏が惚れ込んでくれたのだ（『圧縮された宇宙』が込められた弾丸の性別は女である、という裏設定があったから広義では百合小説に当て嵌まるのだけど本文では一行も匂わせず、付き合ってから来夏だけに口頭で明かしたとき、彼女はとても興奮していた）。

宇宙が無限に繰り返されるのならもう一度ぼくと来夏が生まれるということだろうし、たとえ毎回少しずつ違う宇宙が誕生するにしても、それが無限に繰り返されるのならいつかはまた今と完全に同じ世界ができあがるはずで、そうしたらぼくは改めて生まれて、改めてぼくの人生を体験して、改めて来夏と出会うのかもしれなくて、それ以外にぼくがぼくだと認識する方法がないと言われれば、ある程度は腑に落ちる。同じぼくという存在に至るまでには気が遠くなる時間がかかるのだろうけど、ぼくがぼく以外になれないのだとしたら、その間隔は一瞬でしかない。

来夏が信じている教義に多少なりともぼくの影響が入っていると思えば嬉しくなれるし、少なくとも彼女の概念は天国とか彼岸とか極楽浄土とか、そういう既存の死後よりも、素人が鵜呑みにしてしまう程度には科学的で信用できる。

「来夏は……」ぼくがふと声を出した瞬間は、来夏がサブウェイの丸椅子から立ち上がろうとした瞬間だったから、中腰の彼女を呼び止めた格好になってしまった。「今でも信じてる？　意識ハッシュタグ説」賑々しい店内で来夏は、咄嗟にはぼくの言葉を呑み込めなかったようだけど、三秒後には全てを理解したように苦笑と微笑の中間みたいな表情を浮かべて「恥ずいって。素面やで？」と言って、ぼくには肯定しているようにしか聞こえなくて、不覚にもマスク越しでもわかるほどニヤついてしまって、だからコンカフェに向かう彼女と上機嫌で別れることができたのだけど、そのせいで、取り残されてアイスコーヒーを啜り終え、しばらくしてからやってきた一人ぼっちの感覚が増幅して、凄まじく後悔した。

5

集合場所に到着したのはレイと約束した午後六時の十分前で、改札を抜けたぼくは抗鬱剤の副作用だと思われる喉の渇きに悩まされていたから、ほど近いドラッグストアに立ち寄ってペットボトルの水を手にし、レジで精算するときにようやく気付いてワイヤレスイヤホンを外したら、地鳴りみたいな喧騒が鼓膜に叩きつけられて思わずたじろいでしまった。

店を出ると騒音はますます勢いを増し、迷子みたいに視線を彷徨わせたら、今しがた降りてきた駅の、券売機のそばに設置されているデジタルサイネージにぼくの姿が投影されていて、ディスプレイの中にいるぼくはマスクで覆われている顔の下半分にサンタクロー

スの髭をつけていて、こんなところで自分の格好なんか見たくもないから、映り込まないよう慌てて距離を置いた。それはきっとカメラを組み合わせたタイプの広告で、画面内の拡張現実に人間たちが勝手に取り込まれていて、ぼくは以前にも同じ類いの広告と別の場所で出くわしたことがあり、そのときは隣に来夏がいて、彼女は物珍しそうに観察しつつ無邪気なピースサインを向けていて癒やされたけど、独りのときに出くわすのはテロ同然だし、せめてアバターを着させてほしい。そういえば来夏はぼくがＶＲを始めたのを知らないし、レイのことも知らないし、当然今日の約束だって知らないけど、ぼくがオッサンと飲むより来夏がオッサンと飲む方がよっぽど重大な問題であるはずだから、ぼくは来夏に引け目を感じるより先に、自分がレイと会うためだけに身なりを整えてきた事実とかに腹を立ててしまっている。

半ば強引にオフ会を約束したときの奇妙な熱はほとんど消え失せて、来夏と別れる証拠作りという目的すら義務感に成り果てていて、何度ドタキャンしようと思ったか数え切れないぐらいだけど、さすがに普段仲良くしているレイに失礼すぎるような気もしたから怠惰に鞭を打って、電車を乗り継いでここまで来た自分を自分で褒めたいけど、早速帰りたくなっているのは偽りがたい本音だし、絶対に九時までには帰ると決意もしている。今のぼくを突き動かしている最大のモチベーションは、現在地から電車で二十二分離れたコンカフェで催されているクリスマスイベントに参加して太客とシャンパンを開けたり、特別なチェキを撮ったりしている来夏に対する嫉妬心で、彼女がコンカフェで働いている以上やむを得ないことであるうえ、その手の感情は彼女と別れたい気持ちとは相反するから、レイと話していた時点では会う理由の中に少しも含めていなかったはずだけど、そもそも来夏が前々からクリスマス当日にシフトを入れていた事実に今更不貞腐れたりもしている。とは言え来夏への仕返しだとしても他に方法があったはずで、自らをニートだと暴露しているレイと会うよりは目の前を通り過ぎる一般人に声をかけた方が効果的なのは間違いないけど、そんな勇気は最初からどこにもないし、考えれば考えるほど出口が遠ざかるから、今は彼女とちゃんと合流できることだけを祈っておく。

ちょうど六時を迎えたあたりで改札の向こうから、事前に聞いていた通り黒いパーカーにジーンズを合わせた無精髭で薄毛の中年が、注目されたがっている不審者みたいに顔を左右に動かしながら近付いてきて、人の流れを邪魔する場所で立ち止まってスマホを操作し、呼応するようにぼくのスマホが震え、レイはぼくの外見について何も知らないはずだから、仕方なくこちらから歩み寄って「レイさんですよね。ぼく、サキです」と自己紹介

しなければならなかった。レイは失礼なほどに絶句したまま視線をぼくの頭から爪先まで大袈裟に往復させていて、考えてみればぼくは彼女と違って実年齢すらも明かしていなかったからその素振りは仕方がないのかもしれないけど、個人情報の取り扱いについては絶対にぼくの方が正しいはずだった。

「どうかしました？」一向に返事をしないレイを急かすと、彼女は相変わらず首を上下させながら「いやあ」といかにもオッサンらしい、いがらっぽい声を出してからハゲて赤くなった後頭部を掻いた。「若いな、と思いまして」「こういうときって、ハンドルネームで呼び合うんですよね」「ああ……たぶん、そうだと思います」「知らないんですか」「初めてですから……オフ会……」聞き慣れない敬語を不器用に操りながらひたすら恐縮しているレイを見ていると、こんな人がぼくと、たとえＶＲの中だけでも恋人になろうとしていた事実への怖気と、ぼくの要望を聞き入れてここに来た勇気への蔑んだ敬意が同時に湧いた。

レイの反応を待っていたらいつまでも立ち話する羽目になりそうなので、先導して人の流れに乗って歩きだしたけど、ぼく自身、このあたりにあるのはサラリーマン向けの店ばかりだと認識していて、そのせいでほとんど降り立った経験がないから周辺の地理に詳しくなくて、内心では不安だったのだけど、そういえば何度か来夏との、マンネリ解消を目的にしたデートで使ったことがあるはずで、当て処もなくふらついてみると、飲み屋が並ぶ大通りの隣にはあからさまにぼったくってそうな風俗店が連なっていて、更に先まで足を伸ばすとラブホテルやシティホテルが混在していて、来夏が感心して「三大欲求、全部満たせるやん」と言ったから「繁華街ってだいたいそうやろ」と返した憶えがある。

年末の往来はカマキリの卵の中みたいにごった返していて、それを見越して来夏と遊ぶときに使う中心街から離れた場所を指定したのだけど、それでも人間まみれで手近な居酒屋には入れそうにないし、人いきれをつくっている連中の年齢層の高さに嫌気が差すし、いっそこのまま諦めてレイに帰宅を提案したら、彼女は即座に承諾しそうだ。

本当に言ってみようかと思って首だけうしろを向けたらいつの間にかぼくとレイのあいだにキャッチの男が立っていて、「店探してるんですよね。個室空いてますよ」などと常套句を並べながらレイではなくぼくのパーソナルスペースを侵害してくる。ちらとレイを窺ったら彼女は相変わらず身をこごめて小刻みに首肯しているので「じゃあ、それで」と言ってついていくことにしたけど、ぼくの不快指数はますます上昇していて、クリスマスにキャッチが勧めてくる時点で、行き先は相当劣悪な場所に違いなく、料理が不味かった

り酒が薄かったり、暖簾で仕切られているだけなのを個室と言い張っていたりするのだろうと思いながら雑居ビルの二階に連れられて店に入ると、実際には暖簾すらなくて個室という売り文句自体が嘘だった。

割と混雑している薄暗い店内の外装は明らかに鳥貴族をパクっているくせに卓上の、A4のコピー用紙に筆文字で書かれているメニューはいちいち少し高いと思わせる絶妙な値段設定で、まともな居酒屋に入れなかった客を食い物にしているとしか思えなかったけど、こんなところでは到底長居するつもりになれないからすぐに帰れるはずだし、今のぼくのくさくさした情緒には似つかわしい空間であるような気がする。

向かい合わせに座ってからスマホを取り出して一応来夏からの連絡がないか確認したけど通知は見当たらず、余計不機嫌になっている隙にレイがメニューの紙を自分にだけ見えるよう傾けながら呼び出しボタンを押したけど店員はなかなか来なくて、彼女はもう一度ボタンに手をかけて立て続けに押し込んだけど、そのあいだ、ずっとメニューを独占したままだった。

「サキさんは」ようやくやって来た店員にテーブルの寂しさを埋め合わせるだけの飲食物を注文したあと、レイがおもむろに沈黙を破り、「どうして今日、ここにいらっしゃったのでしょうか」と遅かれ早かれ聞かれると想定していた質問をしてきたので、「逆に、レイさんはどうして来たんですか」とあらかじめ用意していた返事をすると、彼女は「あなたがお声をかけてくれたんでしょう」と店内の騒々しさを突き破るほど声を張って笑い出し、ぼくは何が面白いのかわからず、少し口角を上げて好意的な反応を示してみせたけど、見ようによっては嫌みったらしい表情でもあったはずで、彼女自身だって別に何も面白くなかったらしく、ぼくの反応を確かめるなり顔芸ぐらいに過剰な生真面目さを即座に張り付けた。「いや、本当に良い機会をくださったと思ったんですよ。リアル知人なんて、もう何年もいませんからね。まあわたくし、十年以上引きこもっているのですが近所のコンビニに通えるぐらいの中途半端な引きこもりでして。けれどもＶＲ始めてからは家から出るのさえ億劫になってしまいまして。わたくし、本当に三次元が苦手なんだと思い知らされたのですね……」喋りすぎたと思ったのか、レイは一旦言葉を区切ってこちらを見たけど、たぶんぼくは必要以上に目を見張ってしまっていて、それを悟った彼女は「サキさんを貶しているわけではないんですよ。わたくしみたいな人間は界隈では珍しくありませんから……」と急いで弁明したけど、ぼくが本当に驚いたのがレイの、ＶＲとは異なる一人称だとは気付いていないようだった。

飲み物が運ばれてきたので仕方なくマスクを外すとレイの視線を強く感じたけど思い過ごしかもしれないし、視線の強弱なんて生理的な錯覚でしかないような気もする。ウーロンハイを傾けると案の定水っぽかったけど、それよりも安物のスピリッツとウーロン茶を合わせているせいで倍増しになった薬品臭が鼻について、上唇を濡らしただけで机に置いて目線を上げるとレイがグラスを少し浮かせるように持って固まっていて、もしかしたら彼女は律儀に乾杯する予定だったのかもしれないと思いつき、そういえばＶＲでの飲み会でも乾杯の合図は欠かしたことがなかったとも思い出したけど、謝罪したりグラスを掲げ直したりするつもりにはなれなくて、そのような身勝手さこそがぼくの、彼女に対する……二次元の衣服を脱ぎ捨てた彼女に対する……第一印象による評価に他ならなかった。

「サキさんはどうして今日、ここにいらっしゃったのでしょうか」レイはさっきと同じ質問をさっきと同じテンションで繰り返し、ぼくは思案に暮れているような素振りでもう一度グラスを持ち上げて口に含んだけど、あまり脳は動いていなくて、来夏と別れる証拠をつくりに来たと素直に懺悔するのは簡単だけど、さすがに愚直すぎるような気がするし、何より三次元の彼女にそこまでぶっちゃけて心理的距離を詰めたくないし、言い淀んだままやり過ごそうと企んだのだけど、レイは答えを聞くまで待ち続ける心構えらしく、遠くで若々しい爆笑が弾けていたけど、ぼくたちのあいだには来夏と一緒にいるときみたいなやつではない、普通に重苦しくて気まずい沈黙が訪れていた。

仕方がないから「約束したときに言ったじゃないですか」と機嫌を損ねたみたいに言って、三日前の自分とレイに責任を押しつける。「約束したとき……と仰いますと」「忘れたんですか」そういう言い方をすれば忘れてなくても忘れたような気分になってしまうものだと、ぼくは母の手口から学んでいて、特に自己肯定感が低い人種には効果的であるはずで、レイはしばらく脳味噌がひしゃげるほど考えあぐねてから「すみません」と囁いた。ぼくは彼女ではない何かしらに焦点を合わせようとして、視線を彷徨わせていたら通路の角にぶら下がっている、縁が太いテレビを発見して、注目したら、賑やかな映像の中で女のタレントが大写しになっていて、音声は切られているけど、大量のテロップが表示されるせいで喋っている内容はだいたいわかってしまい、たぶん彼女は若者の代表みたいなツラでガチャガチャと世間とか同世代の男を腐して周囲の失笑を買っていて、下半分に表れたプロフィール文にモデルだとか帰国子女だとかＹｏｕＴｕｂｅ登録者十万人だとか最新著書発売中だとか微妙な経歴がズラズラと並べ立てられているけど、年齢は二十五歳だからただの勝ち組のオバサンだった。

ぼくは所詮現代の負け組だから、才能とか努力による結果とかって清潔な概念が成功者だけに通用するジャーゴンだと思い込んでいるし、そういう風に拗ねてみせても連中に、努力しない理由をつくっているだけだ、と言われたら押し黙るしかないことも知っている。彼らの御高説を賜るのは小学校の道徳の時間とよく似ていて、内心でどう思っているかは関係なく正しい解答が存在するから、ぼくたちは通知表とか小テストの点数のために画一的な答えを書かなきゃいけないだけなのに、他の科目と違って、こちらが自由に考えてもかまわない、みたいな雰囲気を出してるからタチが悪いし、相手の考えへの同調を強制させられるという点では、ヒスッた母を慰めるときと同じだ。偉い人たちの空間でどのような道徳が流行ろうが、ぼくが人生を踏み間違えたのはぼくのせいだし、責任転嫁ばかりする人間は疎ましがられるし、ぼくと来夏の顔面偏差値には天と地の差がある。

オバサンの隣に座っているジイサンが彼女に向けて指を差しながら突っ込んでいて、彼の、オバサンの反応を窺おうとしている目付きがさっきぼくを笑わせようとしたレイとそっくりだったから、何も面白いことは言ってないのだろうけど、彼女は心の底からウケているように手を叩きながら笑っていて、ぼくからすれば勝ち組に見えるオバサンも、テレビの向こう側では末端に過ぎないのだろうし、彼女は彼女なりの生存闘争を繰り広げているはずだけど、だからといって同情するつもりにはなれないし、彼女が同世代を鼓舞しているのではなく年上に媚びているだけだとわかってしまって残念だけど、人間は社会的動物だから、いかに目上をおだてられるか競い合う宿命のもとで生きているのだし、ぼくも彼女みたいなムーブができれば上司に気に入られたのかもしれないと思ってしまって、今年つくったばかりの黒歴史が次々と頭の奥から吐き出されていく。

ぼくはテレビで好き勝手に放言できるほどの才能や実績を獲得してこなかったから、就活に散々苦労した挙げ句、機械メーカーの営業事務に就職した。そこは一応全国規模の会社だけど検索したら関連ワードに『ヤバい』が入るほど有名なブラックで、企業もそれを認識していたのかイメージアップに力を入れていて、ＳＮＳでは自称広報担当が砕けた口調で社内の緩やかな日常を伝えたり一般人のアカウントと絡んだりしていた。ぼく自身は直接やりとりしなかったけど、内定から入社までの期間は公式アカウントが発信するフレンドリーな言葉遣いや絵文字やインターネット特有の雰囲気を見て自分を安心させようと努めていて、今思えば何故騙されたのか不思議で仕方がないのだけど、そういうので騙されるぼくみたいなのがいるからこそ、広報活動に意味があったのだろう。

入社日から新人研修の数日間は同期と一緒だったから乗り切れたけど、一人きりで配属

された事業所で心が折れるのは存外早く、これが大衆向けのテレビドラマだったら一人ぐらいは優しくしてくれる人物が登場するけど、ただでさえギリギリのキャパで回っている現場で新人に教育する暇なんてないのが現実だったので、ぼくは普通に邪魔者だった。ぼくは仕事を覚えるためにメモを取る方法すらわからなかったし、頻繁に言葉遣いを間違えるし、そのくせ年上の立て方も知らないから新入社員としての可愛げを一つも持ち合わせていなくて、容赦なく絞り上げられていたのだけど、だんだん諦められたのか、特に言葉遣いのミスについては怒られるより嘲笑されるようになった。

ぼくを叱責するのは支店長の役目で、父より年上の彼には信じられないほどの大声で怒鳴りつけたあと、肩や背中を強めに叩いてぼくを鼓舞しようとする癖があった。それはまさに脳裏に描いていた通りの、忌避すべき体育会系のノリで、本能的に受け付けられなかったのだけど、もしもぼくの要領が良くて職場の輪に溶け込めていたら、彼の手のひらも許容できていたのかもしれないし、実際にぼく以外の社員は、少なくとも表向きはイヤな顔一つしていなかった。

マナーとか挨拶とか最低限のコミュニケーションの段階でずっと右往左往していて、仕事らしい仕事を何も教えられないままだったから、社内で誰がどのような役割を担っているのか少しもわかってなくて、そのせいで退職直前の飲み会で盗み聞きするまで支店長がＳＮＳで呟いている自称広報担当の正体だと知らなくて、入社前に見ていたのが真摯な神対応ではなく片手間のおじさん構文だと判明して無駄にショックを受けてしまったのだけど、それと鬱病とは何の因果関係もないはずで、単に会社に行きたくなかっただけだと結論づけた方が説得力がある。

診断から自己都合退職まで一直線に駆け抜けたから最後に怒られたのはもう二ヶ月前になるのだけど、支店長の顔は相変わらず鼻先で鮮明に思い浮かんでしまい、なんとか低空飛行を続けていた情緒が徐々に墜落して、今、居酒屋に座っているはずのぼくはところ構わずピルケースを取り出そうと手を伸ばしかけたのだけど、寸前に食器の割れる音がして、続いてやる気のない「失礼いたしましたあ」の輪唱が響き、現実感とともに視線を前に戻すと、レイがぼくを不満げに見つめていた。ちょっと反省しつつレイの言葉に耳を向けると、彼女はＶＲと同じようにｅスポーツの世界大会とか発言が炎上したＶＴｕｂｅｒの話題を繰り出そうとしているようだったけど、たどたどしい口調と過剰な謙譲語が引っかかってなかなか話が進まず、そのうちに聞いているだけのぼくにも緊張が感染していた。ささくれ立った割り箸で皿の上の料理を摘まむが、自分が何を食べているのか感じ取るのが

めんどくさくて、口に入れるとジャンキーな塩味だけが舌の上で転がったけど、レイが「意外と美味しいですね」と言っているのが聞こえて、否定する気になれないのは家庭環境のおかげかもしれない。

ぼくの方はとりあえず来夏を裏切ったアリバイをつくることができたから今日の目的は成し遂げられたのだし、こんなにも気まずい時間を過ごしたとなればレイは必ず幻滅するに違いないから今後も連絡を取り続けようとはしないだろうし、お砂糖関係の話だって考え直すはずで、ぼくは後悔よりも安堵するべきなのだろうけど、認識としてはデートやオフ会というよりも気に入らない上司を接待させられた感覚に近く、そのせいで来夏への背信に対するリアリティが膨らまず、皮肉でもなんでもなくぼくはもう少し楽しむべきだったし、せめて楽しもうとする気概ぐらいは持ってくるべきだったのだろう。

更に沈黙を重ねたあと、七時を少し過ぎたあたりでレイが「出ましょうか」と提案して返事も聞かずに立ち上がりつつ、柱に引っかかっている伝票を荒々しく手に取って、「わたくしが払わせていただきますよ」と吐き捨てた。普段のぼくなら断る素振りを見せるぐらいの社会性は備えているのだけど、レイが相手ならある程度の失礼は許されるような気がして、むしろそうしないと気が済まなくて、鉄パイプみたいな声色で「ありがとうございます」とだけ返した。

店を出ると、レイは案の定名残惜しさを微塵も漂わせずに元来た道を、まるでぼくを置いていこうとムキになっているみたいな早足で歩いていって、一目散に券売機を使ったあとに行き先とぼくの中間らへんに向かって慌ただしく会釈して、声は発さず、改札を通り抜けて、一度もこちらを振り返らなかった。

ぼくはその、猫背にしても曲がりすぎている背中を見つめながら、予定通り、自分は今とんでもないことをやらかしてしまったのだと思い込もうとして、いっそレイに好意を持っているとまで暗示をかけようとしたのだけど、念じれば念じるほどレイの姿が掻き消えて代わりに来夏が浮かんできて、ますます彼女が恋しくなっていくと同時に申し訳なさが並行して疾走し始めて、人間は些細な罪障をいつまでも抱えながら生きていける生き物ではないから、この自罰感情も二十四時間後には忘れているんだろうけど、今だけはどうしても最大化してしまって、ぼくもレイと同じ改札をくぐらなければならないのだけど、いつにも増して混雑しているであろう満員電車を想像するだけで無理になって、一度も使ったことがない配車アプリをインストールしてタクシーを呼んだら今日がクリスマスだったせいで数十分待たされ、ワイヤレスイヤホンをつけて爆音でＳｐｏｔｉｆｙを流している

にもかかわらず声をかけてくる連中を無視するのに消耗して、ようやく到着したタクシーに乗り込んでマンションに帰り着いたらメーターに、奢られた倍以上の金額が表示されていて、絶望的な気分で降車してスマホを見たら九時を過ぎていて、それなのに来夏からの連絡はなかった。

いつもの癖で見上げると五階の通路に人影はなく、もし今手摺りにしがみついているのを見つけたら放置したかもしれないと思いながら一〇三号室のドアを開けると廊下に黒いかたまりがうずくまっていて、それがこちらに尻を向けている母の後ろ姿だと気付くまでにやや時間がかかり、ぼくが立ち竦んでいるあいだに彼女の股間から断続的に水が滴り始めた。

気配を消して扉を閉めても完全な闇にはならず、何故か点灯しているキッチンの光が微かに届き、赤色が基調の妙に派手やかなスウェットを着ている母の見たくもない姿が見えて、彼女は下着をずらして、和式便所を使っているように踏ん張って、フローリングに放尿していた。水溜まりが緩やかに広がりながらこちら側に流れてきて、玄関で身じろぎ一つせずに水の切っ先を見つめていると、酸い臭いが息を止めている鼻の中に無理矢理押し入ってくる。やがて水音が弱まっていき雫を垂らして止まったあと、母はきちんと着衣を整えてから立ち上がって、少しよろめいてから「ああ……」と小さく呻いて、それは自分の行為を悔いたのではなくて、単にそこがトイレでないことを初めて自覚したときの嘆息だった。母はしっかりとした足取りで洗面所に消えていき、その隙にぼくは無音を保てる限りで慌ただしく靴を脱いでから爪先立ちで廊下を通り過ぎ、洗面台と向き合っている母のそばを一気に横切ったけど、彼女は蛇口を全開にして雑巾を濡らしていて、ぼくの影には気付く素振りもない。

母の醜態は死に真似よりよっぽどキツい光景だったけど、不思議とぼくの情緒は波立っていなくて、それは彼女が廊下で用を足している場面に遭遇したのが今夜で三度目だからかもしれない。全て出し終えたあとになって我に返り、清掃を始めるのもいつも通りで、放尿の後始末はするのに希死念慮の後始末はしない母の神経なんて理解したくないのだけど、意図しない排泄が彼女の矜持を傷付けることぐらいは容易に想像できてしまうし、ぼくだって同じ病状だったら、他人に救われるに値するシチュエーションを選び抜いてしまうのだろう。母が廊下をトイレと間違えるようになったのは、知っているかぎりぼくが退職してからで、入眠剤の副作用なのだろうけど、さすがにあんな症状が出たら服薬をやめるはずで、もしかしたら彼女は自分の失態を毎回削除してしまっているのかもしれない。

病んでしまった脳から最初に消えるのが記憶力であると今のぼくは身に染みてわかってしまっているし、中途覚醒の胡乱な意識においては尚更だ。

扉を開閉して自室に忍び込んだまではよかったけど、それからどうすればいいのかわからなくなって、ぼくはぼくで疲れ切っていたから、そのままの服装でゆっくりと倒れ込み、死体みたいに床へ這いつくばって、母が始末を終えるのを待つことにした。扉越しに聞こえていた水音が止み、忙しない足音が数度響いたあとに強かな打撃みたいな音が震動と一緒にぼくへ届いて、きっと勢いよく膝を突いたのだろう。

母は雑巾をフローリングに押しつけて、力強く擦るようにして水分を拭い取っているらしく、ぎゅっぎゅっと鳴る不協和音と微かな軋みが横たわっているぼくの全身に伝わってきて、まるで自分の身体が拭かれているようだと思い立った途端、いったい自分が何に遠慮して何をやっているのかわからなくなって、虚しさと不愉快さのあまり声をあげて泣きたいのをどうにか堪えたけど、顔が妙に熱を持ったから、剥ぎ取るようにマスクを外して投げ捨てた。母を手伝おうかとほんの少しだけ思案したけど、そういえば彼女はぼくが帰宅していることを知らないし、ぼくに放尿の場面を何度か目撃されていることも知らないし、自分自身で目撃したことさえこれが初めてなのかもしれないし、そうだとしたら今、彼女はぼくとは比べものにならないほどの衝撃を受けているはずで、わざわざ姿を見せて辱める必要はないから、ぼくは相変わらず存在を隠すため身動きしないことだけに執心し、そのくせ本能的な部分が感じている小気味よさを押し殺せないでいる。母を想うということはぼくにとって虐待の記憶を蘇らせるのと同義で、今しがた放尿していた彼女の残像と、全身に染み渡っている痛みの痕跡を重ね合わせながら、無様を晒している母に向かって脳内でざまあみろ、ざまあみろ、と繰り返し罵倒していて、できれば明朝以降も彼女の中に水溜まりの光景がいつまでも残り続ければいいとすら望んでしまっていて、うつ伏せのまま最悪な思考をしているぼくの頭を、遮光カーテンの隙間から僅かに差し込む街灯の光だけが見ていて、お前もいずれそうなるくせに、と警告されているような気分になった。

母は時間をかけて念入りに廊下の隅々まで拭き取っているようで、水分を含んだ重たい擦過音と雑巾を洗い直す水音が交互に響いて終わる気配がなく、ぼくが直接彼女の姿と相対したら十数年ぶりに掃除している場面を見ることになるから、感動すらしてしまうかもしれないけど、実際にはずっと倒れ伏して音だけを受け取っているから、肌に合わない睡眠用ＢＧＭを聞いているみたいに不快なまま朦朧としてくる。体感で三十分ぐらい経ったあたりで最後の水音が途切れ、引きずるような足取りが寝室に引き上げていき、耳鳴りが

するほど静まりかえったあともぼくは注意深く息を潜めていて、ようやく起き上がって部屋の電気をつけるときは慎重だったけど、理性が動いていたのはそれまでで、明るくなった瞬間に狂奔の勢いで鞄を漁ってピルケースを掴み取った。タクシーを降りたあたりから心の空白が薬を渇望していて、脈拍を強く感じる手首と心臓と首筋のうちどれかが今にも張り裂けそうだったから、錠剤を五つほど口に含んで、ペットボトルの水をほとんど空にするまで飲み干し、ベッドに身を投げて薄目で壁を見つめていたらスマホが震えたので取り出すと、ＬＩＮＥではなくＤｉｓｃｏｒｄに、来夏からではなくレイからのメッセージが来ていたので、内容を確認せず腰の横に放り出して、目を閉じた。

入眠剤が無理矢理引っ張ってきてくれた眠気を掴もうとしばらく格闘していたけど、するりと逃がしてしまったので、諦めて上体を起こし、入浴の準備をして廊下に出ると、足下でぎゅるりと鈍く滑るような音がして、おそらく母の尿ではなく雑巾の水分なのだろうけど、自分の注意散漫を悔やむ。

総括するまでもなく、今日のぼくの行動が何もかも無意味だったのは明らかで、ぼくは来夏とは関係ないところで勝手に彼女のことがもっと好きになっていて、だからこそぼくみたいな人間から彼女を解放しなければならない。だいたい、ぼく自身を感情移入させ、かつ来夏を激怒させるには女の子と会えば良かったのであって、わざわざレイを選んでしまったのが失敗の原因だったのだけど、その中途半端さは来夏に対する愛情に起因した最後の一線なんかではなく、単純に来夏が飲んでいる相手がオッサンだから、意趣返しのつもりでぼくもオッサンと飲もうとしただけで、そうやって合理的な思考ができないほど頭脳がバグっているのに、どうして古いスマホみたいにすぐ電池切れしてくれないのかが疑問で、それもバグのうちなのかと考えていたら、いつの間にかぼくは乾きが甘い髪に手櫛を通しながら自室に戻ってきていて、やっぱり入浴中の情報は欠落してしまうようだ。

追加の眠剤を服み、小学生から使っていた机の引き出しから最近買ったばかりのカッターナイフを取り出し、刃先を垂直に手首へあてて思い切り引いた。一瞬だけ焼けるような痛みが走ったあと、すうっと泥土が抜け落ちていくような安らぎが訪れて、知らず知らず凝り固まっていた情緒がほぐれていく。リスカの痛みで安らぐよう脳味噌が調教されたのか、リスカしている自分に酔い痴れているだけなのかよくわからず、最初に手首を切ったときはただ痛いだけだったような気がするけど、酒だって最初は不味いだけだったし、抗鬱薬も最初は気持ち悪くなるだけだったし、来夏とのセックスも最初は疲れるだけだったけど、今では全部手放せなくなってしまっている。いずれぼくが求めているのは今夜を耐

えるのに必要な安寧だけで、それには一本の傷では足りなかったから場所を変えて鈍い刃を走らせるのだけど利き手を傷付けるのは難しいから傷痕は左腕に集中してしまって、年老いたらこういう真似をしなくても生きていける心身になってしまうのかもしれなくて、そういう人間にはなりたくなくて、ぼくはリスカを通じて若さにしがみついているだけなのかもしれない。

どす赤い静脈血の粒が膿みのように点々と浮いている手首を、いつか使えるようにスマホで撮影して保存していくうち、画面の左上に表示されている時刻が四桁から三桁に変わって、今年のクリスマスが終わった。

6

結局来夏が「死んでた」とメッセージをくれたのは翌日の正午過ぎで、その四文字からぼくは前日の泥酔と現在の宿酔を読み取ったのだけど、彼女はこれから満身創痍で出勤しなければならなくて、ぼくが彼女と会うには更に一日待たなければいけなかった。

コンカフェが閉まるのは元日だけで、年末年始は稼ぎどきだから、来夏は先月の段階で働き詰めることを宣言していたのだけど、ぼくが必死に頼み込んだら店長と掛け合ってくれて、辛うじて休みを得てくれたけど、遅刻の件もあったせいでクリスマス以降、年内は十二月二十七日と十二月三十日の二日以外全てシフトで埋まっていたし、カウントダウンイベントがあるせいで年越しを二人きりで過ごすこともできない。「うちのスケジュールはアイドルみたいなもんやから、好きはアイドルと付き合ってるんやで」と来夏は自慢と慰めを混ぜた言葉をくれたけど、ぼくはアイドルじゃなくて来夏が好きだからあんまりピンとこなくて、「まあ、ぼくも仕事納めがあるから」と刺々しい嘘をついたら、彼女はぼくの不機嫌を察してくれて、最近はよく長文のメッセージを送ってくれるようになったけど、来夏の文章力が足りないのかぼくの読解力が足りないのか、たぶん後者だと思うけど、結局何が言いたいのかわからないことが多々ある。

「一月の後半は好きとずっと一緒にいれるから」と来夏は言ってくれて、実際に正月明けから、大学生が試験を終えて暇になる二月頭まではコンカフェの閑散期であるらしいのだけど、ぼくとしては今年中に彼女との関係を終わらせてしまわなければならない強迫観念に駆られていて、レイとの密会が少しは決意を後押ししてくれるはずだったけど、結果としては完全に失敗で、そもそも先月の時点で別れる心づもりだったくせに来夏に休んでく

れるよう懇願している段階で情緒が矛盾していて、あまつさえぼくはこの期に及んでなお円満な別れを夢見ていて、最後の思い出をつくる、みたいなゲロキモ概念に囚われてしまっている。

だからといって連日のイベントで疲れ果てている来夏を無闇に連れ出すわけにはいかなくて、必然的に彼女のアパートでデートすることになり、ぼくとしては二人で一緒にいる以上の出来事は求めていなかったのだけど、来夏がぼくの手首にできた新しい傷痕を犬みたいに嗅ぎつけて舐め始めたおかげで、互いの身体を使ってじゃれ合う流れになった。

来夏は新手のリスカ痕を発見するたびマーキングするみたいに舐めたがるし、それ以前からぼくの薬指の付け根に指輪みたいな歯型をつけるのが趣味だったくせに、ぼくには背中にキスマークをつけることさえ許してくれない。転んで怪我するのが怖いからと言って絶対にヒールを履かない来夏の、肌に対する潔癖症じみた執念は、過去に紐付いた深刻な事情があるのかもしれないけど、恋人としてはとても尊いし、彼女がコスプレするとしたら女神以外にはありえなかったのだろう。それでも熱心に手首を舐めた舌を口の中に押し込んでくる来夏には同じ人間として嫉妬みたいな感情が芽生えてきて、ぼくだって彼女の成分をたくさん吸収したくなって、お互いに服を着たまま、彼女の皮膚と体力をいたわりながら手練手管の限りを尽くしたのだけど全然達成できそうになくて、むしろその困難さに脳細胞がどんどん盛り上がっていたのだけど、ぼくの胸に顔を埋めたままの来夏が「同棲の話やねんけどな」と言い出した瞬間に何もかも冷え切ってしまった。

ぼくはこれまで何度も同棲の二文字から逃げ回っていて、来夏だって承知しているはずで、だから今、「やねんけどな」のあとを自ら続けようとしない彼女は明らかにぼくを試しているのだけど、メンヘラは常に試し合ってしまう生き物だから嫌悪感はなくて焦燥感ばかりが募る。欲情のためだけに働いていた思考がたちまち打算へ変遷して冷静になったのだけど、その落差を悟られたくなかったからしつこいぐらいに頭を撫でながら「マリがなあ」と定番の逃げ口上を垂れ流した。ぼくは付き合い始めた頃に母の病状や死に真似を何から何まで来夏に披露してしまっていて、それは互いの深部を引き出すための最高の引き金になったし、以来ぼくは彼女の前で母を呼び捨てするようになっていて、ぼくたちのあいだでマリという呼び名はすっかり蔑称になっているような気がする。「せやけど、最近安定してんねやろ、マリ」「え。なんでそう思うん」「好きが自分で言うてたんやん」安定自体は朗報だから、たぶん本当に言ってしまっていたのだろう。母の死に真似が再発したという悲報だけを説明するのは簡単だけど、ぼくは実家ではなく会社が用意したアパ

ートに住んでいることになっているから、来夏に納得してもらうなら仕事を辞めてしまった事実を隠していられないのだけど、ぼくはまだ矜持を捨てられないでいるから袋小路に陥ってしまって、脳内の視野を来夏から剥がして今いる場所に向けるしかなくなってしまった。

来夏が住んでいるアパートは、昼職のバイトだけで賄えるほど家賃が安く駅から遠く、部屋自体も古びた臭いの染み付いたワンルームだけど彼女はそれほど頓着していないようだった。室内のインテリアも最低限に留められているけど、右半分を占拠しているベッドの枕側にはマイメロのクッションとか、すとぷりの缶バッジで埋められたワイヤーネットとか、ツイステのポスターとかが敷き詰められていて、来夏が雑食オタクであることが存分に表現されているけど、以前は一つのジャンルで固められていたから、コンプリートを目指して借金をつくってしまった反省か、もしくはコンカフェで客の話題に対応するための予習なのかもしれない。ビデオ通話では常にその一画がインカメラに捉えられているから、そこが来夏にとって理想的空間なのだろうし、派手さを集中させるのは普段のファッションの特徴でもある。「贅沢のしかたがわからんねんな」と来夏は冗談めかして言うけど、彼女の生い立ちを考えればあまり笑えないし、本当に贅沢のしかたがわからないのかもしれない。

観察にかまけて返事から逃げているあいだ、来夏は眠っているように穏やかな吐息でぼくを撫でていたけど、背中に回している腕の力は少し強めてぼくを、答えを聴くまで逃さないようにきつく抱き締めた。ぼくは「相談なんやけど」と曖昧に話を逸らし、それでもなお後続の言葉が思いつかなかったので「来夏のとこ、距離感バグってる客いる？」と脈絡のない質問を投げかけたら、割と真面目な話題だと思ってくれたのか、来夏はふっと身体を離して隣に転がった。「基準によるよな。大前提、コンカフェやもん。なんで？」「会社にそういう上司がおったら、どうすればいいと思う」本当の体験を混ぜるといくらか滑らかに話せた。「うちの客対応なんか役に立たんくない？」「そこは、ぼくに寄せてもろて」

来夏は横になったまま喉で低く唸りながら顔を反らし、手を伸ばしてぼくの顎をくすぐり始め、眉を顰めてむずがるぼくをけたけた笑ってから、「周り見て、ある程度は受け入れなな」と言った。「変に悪印象残したら粘着されんねん。せやから、わたしは他の人と一緒で近付いてもおもんない存在ですよ、ってアピールするんがええんちゃうかな」「それは、来夏がいつもやってること？」「ちゃうやん。寄せたんやん。うちのとこやったら

真逆で、むしろそういう客に親切にせなあかんよ」「親切って、たとえば」「変な意味やないよ。目を見て話すとか、基本的なやつ。コンカフェのイタ客ってだいたい人間不信拗らせてるタイプやし、キャストにもキツく当たって敬遠されるから、普通にしてるだけで周りより優しくしてることになる。まあガチ恋に進化したらめんどくさいから、そのへんはバランスやけど」「変な意味に聞こえる」「妬いてる？」「キモいって思わんの？」「キモいというか、無理みはある。けど、コンカフェなんて基本、人間に対する無理って感情との戦いやからな。そこで耐えたら人気出るし、バックも増えるし、そしたら推しと好きに投資できるし。今のうちの稼ぎやったら二人暮らしの生活費折半できるし、なんならもっと払えると思うんやけど」

いつの間にか来夏は指先を止めていて、見上げる視線には熱気が帯びていて、ぼくは自分が強引に歪めた話題を、彼女の手腕で柔らかく、見事に元の路線へ戻されたことを悟り、彼女がいつになく本気であることにも気付かざるを得なかった。だからといって来夏の申し出に易々と乗るわけにはいかなくて、ぼくには昔から雑多な事務作業を杞憂としか思えないほど過大評価する節があり、その性向は病んでからいや増しになっていて、アパートを引き払って実家に戻るだけでも死にそうな思いをしたのに、来夏と同棲するための諸々の作業をこなせるなんて到底考えられないし、それに何度も忘れかけてしまうけど、ぼくは彼女と別れなければならなくて、おそらく同棲の手続きと別れ話のハードルは同じぐらい高いから、どちらも果たせないまま、ぼくは思わせぶりな態度をとり続けてしまっている。

ひたすらに罪悪感ばかりが迫り上がってきて来夏の提案を断ることも別れを切り出すこともできずに、両肘で上半身を持ち上げて目線の先にある窓の輪郭を追いかけていたら、カーテン越しの西日が刺さって視界が徐々に黒ずんでいく。会社に住宅補助の申請をしてまだ一年も経っていないし、新人の身分で角が立たないよう説得するには時間がかかる、みたいな戯言を吐くのがこの場をしのぐ最適解なのかもしれないけど、そういう器用な嘘がつけたらぼくはレイと会っていなかっただろうし、何よりも来夏が、ぼくが金銭的な事情で同棲を回避していると思っていたらしいことがショックだった。来夏はいつも優しくてぼくを理解してくれようとするけど必ずしも正しく理解してくれるとは限らなくて、客観的には贅沢すぎる悩みこそが彼女に対する最大の不満かもしれなくて、次第に目の前の問題から遊離させる方向で思考を巡らせていたら、痺れを切らしたらしい来夏が「前彼の借金も返し終えたから」と青天の霹靂としか喩えようがないセリフをぶっ込んできて、ぼ

くは彼女の言葉を適切な漢字に脳内変換するまでひどく時間をかけたあと、「前彼って、何」と哲学的な問いを発した。

「前彼は前彼。好きと付き合う前に一瞬だけ一緒だったヤツ」「その男に金を借りてたの」「ちゃう。その男が金を借りてた」来夏はさも当たり前のような口調で半年前に倍ぐらい年上の前彼とやらから金に困っている旨のメッセージが届いたこと、そのタイミングと彼女が箱推しで借金をつくったタイミングがほぼ被っていたこと、だから思い切ってコンカフェで働く決意をしたこと、なんかをぎこちなく語った。「つまり、四年以上前に別れた男の借金を肩代わりしたの」「うん。だってその人が保証人になってくれたからここに住めたんやし、当時のうちガチ病みやったから全然働けんかって、生活費も全部出してくれてたし。恩ばかりあったんやけど、何も返せんうちに別れたから」

ぼくにとってただただ新鮮で不快な情報をどうにか消化しつつ「なんで教えてくれへんかったん」と訊いたけど、その叱責は来夏への怒りを三割しか表現していなくて、どちらかというとぼくは、コンカフェで働き始めた本当の理由を聞き出そうとした午前三時に酔い潰れた来夏がまだ隠し事をしていたこと、様々な理性をちぎって捨てたあとの彼女が自白してくれなかったことに怒っている。「言ったよ」「聴いてない。聴いてたら今更深掘りしない」ぼくの反論には説得力があったらしく、来夏は一瞬顎を引いて口ごもったけど、すぐに「だって好きと会う前のことやから、心配させられへんやん」と噛みつくように言って、その声色に来夏がマジギレする予兆を感じたのだけど、今回ばかりは自分を止められなかった。「そういう意味じゃない」「じゃあどういう意味なん」ぼくには何もかも明かしてほしかった、といかにもメンヘラじみた泣き言を口にすれば良いのだけど、嫉妬と自尊心が邪魔をして核心的な質問ができない。「付き合ってたのは前かもしれないけど、借金は今の問題だよ」「だから、全部返したって言うたやん」あくまでも来夏は真剣な表情で言うから、彼女の回答がいちいちズレていることをなかなか指摘しづらいし、そのせいでますます苛立ってしまう。

手頃なクロミのクッションを、爪を立てて握りしめた途端に、物に当たるなんて最低、という倫理がポップアップし、すぐに手を離すと、遣り場のない歯痒さが脳の中心に溜まって澱みをつくった。表情筋を弛緩させて半目で睨んでくる来夏がぼくの言葉を待ち構えているから、急いで悪意をフル稼働して理屈を組み立てる。「返済が終わったあと、男と連絡取ってるの」「ううん。もう連絡しやんのも約束してたし。ＬＩＮＥの履歴見る？」「見ない。来夏は、優しいのはともかく不注意だよ。元カノに金借りるなんて碌な人間じ

ゃないし、来夏が危ない目に遭っていたかもしれないんだから……」なんて、さも来夏の身の上を心配しているような説教するのはひどく欺瞞的で、本当はぼくにさえ明かさない特別な事情を、以前の恋人と共有していた点が気に食わないだけなのを、どうにか道徳のフィールドに引き込んで正当化したいだけだ。

落ち着こうと努めるのだけど来夏は猶予を与えてくれずに「ほんまに何もなかったもん。信じてくれへんの。ＬＩＮＥ見て良いって言うてるやんか」と一層ボルテージを高めながら吠えていて、ぼくは呼応するように「違うって」と叫んでしまったけど、部屋の壁が痴話喧嘩に耐えられるほど分厚くないことに気付いて声を落とし、「信じてるから、何があったか知りたいんだよ」と言い聞かせたけど、彼女にはぼくが冷静ぶっているように見えたらしく、かえって激昂して転がり落ちるようにベッドから降りて少しずつ向こうの壁際へ後ずさりながら「何も迷惑かけてないもん」と、言葉だと判別できる限界の金切り声で絶叫した。

鼓膜を劈いた高音の残渣が延々と響いていて、声の主である来夏も同じらしく、どちらも苦い顔で黙り込む。身体が離れ、さっきまで感じていた彼女の体温が消え失せたおかげでぼくたちはようやく平常心を取り戻したけど、仲直りには程遠いことは二人とも理解していて、ぼくは来夏から一定の距離を取るようにカーブを描きながら部屋を出ようとし、ふと思い立って「一つだけ確認させて」と三角座りの来夏に声をかけた。「怒ったら関西弁取れるんやめてや。怖い」「他にそういう関係の相手はいるの」「おらん」「へえ」ぼくは来夏を信じているから、彼女の返答には心底安堵したはずだけど、口から出てきたのは皮肉と不信の象徴みたいな冷えた溜め息で、そのまま取り繕うこともできずに「帰るね」と言って玄関先の無個性なコートハンガーに手をかけた。来夏は「泊まっていかんの」と当初の予定を、脅されているような弱々しい声で呟いたけど、ぼくは何も応じられずに外套を着込んで、彼女もそれ以上追及してこなかった。

扉を閉める寸前、微かにしゃくり上げるような声が聞こえたけど、気のせいかもしれない。アパートを出て駅まで続く住宅街の、勾配の激しいアスファルトを突き進んでいるあいだ、イヤホンをつけているわけでもないのに無音が支配しているようで、宵闇に次々と街灯がともり始めて、その都度眩しかった。タクシーを呼ばずに済んでいるぶん、レイと会ったときよりも情緒は落ち着いているのかもしれないけど、来夏よりもレイの方がぼくを傷付けたなんて絶対に受け入れられないから、ただベクトルが違うだけだと信じたい。道のりを半分ぐらい差し掛かったとき、電柱へ寄りかかるようにして立ち止まってスマホ

を取り出し、種々のアプリが押しつけてくる通知を拒絶して、間違って来夏のメッセージに既読をつけないように集中モードをオンにした。

改札をくぐって、すぐにやって来た電車に乗り込み、財布をすられても気付かないほど危なっかしく物思いに沈むと、脳内に未だ怒っている自分と、怒っている自分を俯瞰で眺めている自分が同居しているのが見えてくる。いつからかぼくは喜怒哀楽を客観的に解体できるようになっていて、どうしてそうなったかは憶えていないけど、この能力が一番効果を発揮したのは幼い頃、不条理に怒鳴り散らす母に対処する場面だったから、これも親の教育の成果なのかもしれない。ネガティブな感情にネガティブな感情をぶつけても余計に悲惨になるだけだし、子どものぼくが大人の母に物理的にも精神的にも勝てるわけがなかったから、ぼくは母のご機嫌取りに注力しないといけなくて、そのためにはまず、自分の気持ちを遠くから観察して他人事として捉える訓練が必要だった。

気取ったカタカナで言えばアンガーコントロールみたいなセルフマネジメントを、ぼくは言葉を知る前から会得していたのかもしれなくて、だからぼくはぼくを飼い慣らせるはずなのに、来夏を相手にすると全然役に立たなくて、来夏とは特別な関係だから、愛しているからこそ本気になってしまうから仕方がない、なんて逃げ道は選びたくなくて、そのような見方に立ってしまったら、あの頃殴りつけてきた母がぼくを愛していたと認めなければならなくなってしまう。ぼく自身の来夏に対する振る舞いが、母のそれと変わらないのかもしれないと思うと、希死念慮とは異なる死にたさが芽生えるから、ぼくはできるだけ母を思い出さないように行動したくて、だからこそ自分の怒りを強く自覚するようにしているのだけど、そのまま怒り続けて来夏を痛めつけてしまっている。

来夏が迂闊な告白をしてくれたおかげで同棲の件はまたも有耶無耶にできたけど、離別の件も同様に有耶無耶にしてしまっていて、ずるずると尾を引きたくなかったから年末までにって期限を切って動いていたはずなのに、怒りとか恋慕とかが妄りに発生したせいで、ぼくの言動は当初の決意からすっかり乖離してしまっている。脳味噌が数多の感情で水没してしまっていて、人間は、無数の心理的機能を同時に稼働させるから言行が一致しないし一貫しないそうだけど、そういう言い訳の無間地獄に何の意味があるのかわからないでいるうち、ぼくはマンションまで帰り着いていて、電車を降りた記憶も改札でＩＣＯＣＡをかざした記憶も残っていなかった。

一〇三号室に足を踏み入れてぐいぐい進むと母がぼくの部屋へ続く扉のドアノブにハンドタオルを引っかけて死のうとしていて、慌てたふりをして救い出したのだけど、隙間が

空きすぎていたから絞まるはずがなくて、ぼくが予定通り来夏のアパートに泊まっていたらどうしていたか疑問に思って、もしかしたら母はぼくに発見されないまま五階の手摺りにしがみついていた日を何度も繰り返していたかもしれなくて、思わず鼻で笑いかけたけど、今宵の自分が来夏ではなく母を選んだと解釈することもできるから、本当に嘲笑すべき相手は鏡の向こう側にいるのだけど、どうしても自分の姿を直視する勇気が出ない。

自室に入ると自分の体臭が立ち込めたように感じて吐き気がした。部屋の居心地が悪くなったなら己の手で掃除をすれば良いだけなのに、ぼくは近日中にまた、母が頼んだ家事代行の人が来るはずだと見込んで、その日まで耐えようとしていて、こういう風に我慢と怠惰の中間点を突き進んだから母は生活能力を失してしまったのかもしれない。

ぼくはスマホを取り出して通知欄が静まりかえっていることに安心してからＹｏｕＴｕｂｅアプリを起動して、登録しているチャンネルが目ぼしい動画を上げていないのを確認し、それから何の気なしに、クリスマスにクソみたいな居酒屋で見た二十五歳のオバサンの名前を検索欄に入力した。

オバサンはメンタルヘルス系の動画をたくさん載せていて、その中でも前後を『毒親』と『虐待』の二語で挟まれているタイトルを選んでみると、いらすとやとかテロップとかが大量に使用された安っぽい演出を挟みながら彼女がカメラ目線で語り続ける動画が表示されて、テレビよりも映えてないから美人ではなくなったぶん身近な人物であるかのように錯覚してしまって、彼女は「自分は当事者ではない」と断ってから「虐待されて育った子どもは普通よりも早く大人びるようになる」とか「幼い子どもは弱くて、愛されることでしか生きていけないから、虐待されればされるほど親を愛するようになる」とか、どこかで聞いたことがあるような表面的な言葉ばかりを並べていて、最後も「親からは逃げてもいい。とにかく死なないで」ってありがちな優しさで締めくくって、勝ち組のオバサンが机上で勉強しただけで饒舌を振るっている、良く言えば被虐待者に寄り添っているような、悪く言えば能天気な正義感に溢れた空論に、当事者としては虫唾を走らせなければならないのだろうけど、十五分ほどの動画を見終えたぼくは自分でも信じられないぐらいどろどろに泣き崩れていた。

7

乾杯の合図とモーションのあと、「もう来ないと思ってた」と言ったレイはクリスマス

に出会った見窄らしい中年ではなくて見慣れた銀髪の美少女の外見と声色と口調だった。画面上にしか存在しない酒場の椅子に腰掛けたぼくは上の空で「そうだね」と返し、気の利いた言葉を付け加えようとしたけど相変わらず上手くいかない。今日までＤｉｓｃｏｒｄの連絡に返事をしなかったし、彼女が言う通り、もう来るつもりなんかなかったはずだけど、ふとした空白の時間にぼくはまたネットカフェに行き、鍵付き個室に缶酎ハイと借りたゴーグルを持ち込んでＶＲを起動して、レイがいつもの、誰もいない酒場風のワールドに一人っきりで過ごしているのを見つけるなり手癖のようにログインしてしまっていた。

この二日間、来夏と直接会う機会はなかったけど関係は順調に修復されていて、昨夜は寝落ちするまでビデオ通話を繋げていたほど改善しているけど、話したことといえば美容系インフルエンサーとかコンカフェに来たイタ客の話題ばかりで一昨日の喧嘩について混ぜっ返すことはなく、互いが互いに遠慮したままだ。

「このあいだはごめんね」いつも通り微笑みをたたえたレイが言っているけど、謝られる筋合いなんてないし、三次元のレイの顔はもう、こっちの頭の中では鮮明に思い出せないほど薄れてしまっているし、ぼくはまだ、何故ＶＲゴーグルを被ってしまったのかを考え続けていて、仮想空間にいるあいだは存在自体に覚える緊張感を全部投げ出せるから、ぼくは情緒を休憩させるためにアバターを着込んでいるのかもしれない、と自分でもいまいち納得できない結論に達したばかりだった。

距離の遠近や相手が誰かは関係なく、ぼくには人と話していると認識するだけで息苦しくなってしまう傾向があって、単純に人間への疎外感によるのだろう。小さい頃から家では母に殴られていたし、高校まではイタい喋り方が原因でハブられていたし、そのせいで世界に対する信頼感なんて少しも育たなかったから、他人を信用する理由なんて身につくはずもなかった。ありのままの自分が受け入れられるなんて一度たりと思ったことはないけど、努力したって何も変わらないとは思っていたし、自分なんてそこにいるだけで周囲を不快にさせる邪悪だと信じていたから、ぼくは十年ぐらい前から外出時にマスクを常用して存在を隠そうとしていたのだけど、いっそそれすらも、弱々しいアイデンティティだったのかもしれない。

その点、ＶＲであれば誰かに認知される自分、みたいなものをリアルタイムで取り繕い続けなくて済む。少なくともアバターに身を委ねていたら、どれだけ気の抜けた不細工を晒していても見咎められないし、トラウマを思い返して頭を抱えても現実みたいに精微には反映されないし、叫びたくなったらマイクをミュートにすれば良いだけだ。実際にその

ような奇行に走ろうと思ったことはないけど、奇行に走っても大丈夫だという安心感がちょっとした余裕を生んでくれるし、生まれつき実家が平和な場所ではない自分にとって余裕を生んでくれる場所はネットカフェの鍵付き個室だけだ。

「誤解してほしくないんだけどね」ぼくが黙り込んでいるのを怒っていると解釈したのか、レイは少し怖じ気付いているように力なく続ける。「この界隈って別に社会不適合者ばかりじゃないから。ちゃんと働いている人だって大勢いるし、既婚者も多いし、女の人だっているし……」レイとしては、彼女にとって生き甲斐であるこの空間の名誉を意地でも守っておきたいのだろう。彼女自身ではなく界隈全体を慮るあまり、自分をちゃんと働いている人とか既婚者とか女の人とかより格下に位置付けているけど、気付いていないのだろうか、それとも無意識に染み付いているのだろうか。

ぼくはコミュニケーションを忘却したまま考え続けて、それはレイとかＶＲのことだけではなく来夏との関係性にまで飛躍していて、できるだけ早く来夏と確実に別れられるよう計画を立てるべきなんだろうけど、今のぼくにはそこまで見通すことができない。

どうもぼくの脳はペース配分を忘れてしまっているらしく、健康だった頃は睡眠と起床によってきちんと区分けできていたはずなんだけど、そうやって健全に生きていたのがいつまでか、そもそもそんな時期が存在していたかどうかすら定かではない。自意識がはっきりしているあいだは何らかの情緒の処理をし続けなければならないような気がして、一旦思考のスイッチを入れてしまうと区切りをつけることができないのだけど、首から下と同様に脳味噌にも体力がないからすぐに疲れて心身の機能のあちこちが明滅してしまって、目や耳から入ってくる情報が欠落したり入浴時に意識が飛んだりするのも、本来なら五感のリソースになるはずのエネルギーが、無駄に往復し続ける思考回路に奪われてしまうせいなのかもしれない、と無駄に往復し続ける思考回路に身を窶していたら脳がオーバーフローしたのか、不意に視覚が元気になって、ぼやけた酒場の風景に溶け込まず、際立っているレイがこちらに顔を向けていた。アバターなのに目の奥が笑っていないような気がして、あの日、テレビに注意を奪われているうちに拗ねていた中年が重なった。ゴーグルをずらして手元の缶を探そうとしたら、次元の差に三半規管が追いつかず、少し目眩がしたから勢いで酎ハイを一気に呷って頭の底までぐらつかせて「会ったときの喋り方、なんだったの」と行儀の悪い関心事を口にすると、彼女は不機嫌を感じさせないまろやかな声で「やっぱり気にするかあ」と呻いた。「わたしみたいなタイプって他人との距離の詰め方がわからないから、ずっと敬語で喋るのが安パイだと思っちゃうんだよね」「でも今は普

通に話せてる」「それはほら、受肉してるからだよ。わたしにとってバ美肉はコミュ症を治療するリハビリみたいなところがあるのかもしれない。それに、三次元のわたしがこんな喋り方してたら、この前より気持ち悪くなっていたと思うよ」

リハビリ、という概念はぼくがＶＲに舞い戻った理由を綺麗に言い表しているような気がして、つまりレイとぼくは似たもの同士である部分があるということで、ぼくは同士に相対して喜ぶべきなのに、代わりに無視できない大きさの反発心が去来していて、それが自己嫌悪とか同族嫌悪ならまだ釈明の余地があるけど、レイへの単なる純粋な嫌悪の可能性が高いのが致命的だった。

「レイって何歳だっけ」ぼくは確認するように、挑発するように訊ねる。「え、どっちの方」「リアル」「リアルは……三十五」「ぼくは二十三」「まだ」「老人」我ながら絶妙なタイミングでレイの気休めを遮れたけど、絶妙すぎたのか彼女は混乱したように「え、インターネット老人会みたいな話？」と問われたから「や。普通に老いた」と追い込むと彼女は「ああー」と考えあぐねているような、納得しているような母音を長々と吐いてから「わたしは三十五まで生き延びてしまってるけど、別にアラサーになっても、アラフォーになっても、特に何も変わらないよ」と優しく説き伏せるように言って、それは誰もが口にするであろう、ぼくが一番聞きたくない答えだったから、やっぱりぼくは彼女と根本的にそりが合わないのかもしれない。

二本目のプルタブをちぎるように開けて強かに飲み干そうとして、胃が受け付けずに苦戦してしまったけど、ぼくは不躾なまでに勢いよくレイを責め立てたいから力を込めないといけなくて、なんとかアルコールを臓腑に叩き落としてから、反論しようと声をあげかけたとき、レイの方から物音がして、次いでガサガサと忙しないノイズが走った。「ゆうちゃん」と甘えているような声が聞こえるけど明らかにレイのそれではなく第三者の声色で、どうやら彼女はマイクを切り損ねたようだった。「またお姉ちゃんがうるさあしてんのよお」ぼくはレイに気付いてもらおうと何らかのアクションを試みるけど声を出すのはためらわれるので絵文字を表示させたけど、「いつものことやんか」というレイの、一瞬でがさつになったトーンはさっきより遠ざかっていて、おそらく彼女の中身はディスプレイではなく入室してきた誰かの方を向いているのだろうし、ゴーグルも外しているのだろう。「いちいち報告せんでええて。直接姉ちゃんに言えや」「せやけど、年頃の女の子にそんなん言われへん」「あいつは女やのにどこからそんな元気が湧いてくるんやろうな」さっきとは別の、ボイスチェンジャー越しでも嗄れているとわかる老いた声が響き、ぼく

はようやくレイの部屋に両親が訪れたのだと察して自分のマイクをミュートにし、ヘッドホンのボリュームを上げた。「あの元気がユウキにあったら今頃おれらにも孫が二、三人おったかもしれへんのに」含み笑いすら込めながらのんびりと言い放つ父親らしき人物がより一層不気味だった。空白。やがて母親らしい女が「ええやんか。代わりにゆうちゃんはずっとここにおってくれるんやから」と慰めているつもりらしい呪詛を吐いたが、それにレイが納得しているかどうかまでは伝わってこない。

「それで、何やの。パパママ二人揃って」レイが寛いだ口調で問いかけている。普段からときどきマイクをミュートにするとき、彼女は両親とこのようにおぞましい会話を繰り広げていたのだろうか。息を吐き出す量が吸う量に追いつかなくて、肺が膨らんで肩や胸の肉が痛みだしたけど、ぼくは聴覚への集中をやめられない。「あ、これな。お父さんと、二人からのクリスマスプレゼントです」「おれらもう、ユウキの欲しいものなんてわからへんから、これで好きなもの買えな。年越したら小遣いとお年玉も渡すからな」両親の声が一旦近付いて、また距離を取る。紙幣をめくる乾いた摩擦音が聞こえたような気がした。「いっぺんに渡してくれたらええのに」とレイがはにかむように言ったけど反応はなく、「なんやお前。またこんな女向けみたいなアニメ観てるんか」と父親が言った声は明らかに画面とマイクとぼくに向けられていた。

「これはアニメやないよ」レイが和やかに説明しているがまた無視されたらしい。「ほんまにお前は女の腐ったようなヤツやな」「アホ、女が腐ってもこんなんにならへんわ」残酷な軽妙さで母親が合いの手を入れて二人の心底おかしそうな笑い声が耳朶を打つ。レイも、追従気味に笑っている。十秒以上も延々と続いていた。まるで誰かが正気に戻るのを見計らっているかのように、三人ともが芝居じみた笑いを笑い続けていた。

様々な情緒が溢れだして心臓が溺れていて、それは虚しさとか失望感みたいなネガティブな感情ばかりではなくて、確かに喜びが含まれていた。目元が緩んでいるのがわかった。

ぼくはぼくに嘘をついていた。自宅ではない場所で余裕が欲しいだけだったら、わざわざVRを始める理由なんてないのだ。ネットカフェに安くない追加料金を支払って、不愉快なほど狭い鍵付き個室に籠もって、それでも仮想空間を選んだのは、ここなら自分と同じかそれ以下の社会不適合者と交われると思ったからで、それは自己肯定感が極限まで低下したぼくが死に物狂いで悪知恵を巡らせた末の結論だった。

ぼくは自分を中年だと認めながらも、他方でぼくはまだ話を聞いてもらえるだけの若さがあるとも思いたくて、それを情緒を守るための適応だと言い訳するのは容易で、特に病

んでからは自分の不遇を嘆きたくてたまらなくて、担当医だけでは全然足りなくて、かといって来夏に打ち明ける度胸はなくて、スマホだけで完結できるお手軽な解決法が欲しくて、最初はメンヘラが集まるネットコミュニティを移ろっていたのだけど、メンヘラ界隈も数々の共同体と同じで年寄りと常連が空気をつくってしまっているから新参はなかなか馴染みづらくて、色々と情報を吸収しているうちにいよいよＶＲまで行き着いて、レイに出会って話すようになったけど、何かを吐露したわけではないし、むしろ彼女の自己開示に耳を傾けるばかりで、たぶんぼくは自分未満の人間を観測して安心したかっただけで、要するにぼくは最初からレイのことを、差別と言ってもいいぐらい見下していたのだ。レイの底辺感は今まで一定の抽象性を纏っていてはっきりとはしていなかったし、クリスマスに会ったときの立ち振る舞いでさえ確定できなかったのだけど、今盗み聞きした内容は具体的に彼女の立場や弱さを表していて、ぼくはひどく昂揚してしまっている。愛してくれる恋人を必死に裏切ろうとして、親の自殺未遂へ冷淡に対処して、財布から万札を抜くカスが、親からクリスマスプレゼントに現金を貰って喜んでいる三十五歳を嗤っている。こうしてレイを嘲笑している自分をムービーで撮れば、来夏は何よりもぼくに幻滅してくれるかもしれないと心の端で思いついたけど、カスだから実行には移せない。

希望と絶望を合い挽きにした興奮は微かに聞こえたレイが息を呑む音に断ち切られた。ようやく音声が筒抜けだったことに気付いたのだろう、彼女のアバターは不自然に動作した次の瞬間、すっかり掻き消えた。

ぼくは誰もいなくなった仮想の空間をこれまでにないほどじっくりと見つめながら、来夏と別れる決意をもう一度固めようとしていて、そういう考えを取り戻せたのは、レイをはっきりと蔑むことができるようになった今、心に大きな余裕が生まれたからだとしか思えない。

8

年内最後のデートも三日前と同じように来夏のアパートで会う予定だったけど、直前になって彼女から『カラオケ行きたい』とメッセージが来たから急遽いつもの駅前で落ち合うことになって、たぶん彼女はアパートで会うよりはカラオケであまり視線を合わせず画面の歌詞を見ていた方が嫌な空気にならずに済むと考えたのだろうけど、ぼくは機会を窺って今度こそ彼女に伝わる形で別れを切り出そうとしていたから、防音性の高い場所であ

るに越したことはないと勝手に企んでいて、約束の五分前に駅前へ着いたときには既にそこに来夏はいて、今日の彼女は傍目から普通っぽく見えるベージュのコートを羽織っていたけど、袖口の感じから内側に緑色のデカいテディベアが描かれた黒いパーカーを着ているのがわかって、でもそういうことには一切言及せずに簡単な挨拶の言葉だけを交わして、その時点で来夏の表情は沈んでいて、ぼくも彼女と釣り合うほどにネガっていて、来夏が差す日傘の中に身体を半分入れながら、手を握って連れ立って行き付けのカラ館に入ると、指定されたのは二人で使うにはやや広い部屋で、コートを脱いだ来夏はやっぱり例のパーカーを着ていて、ぼくたちは同じソファに少し距離を置いて座って、妙に薄暗い光の下でぎこちなく端末を渡し合いおざなりの拍手を挟みながら、ずとまよとかあんスタとかを交互に歌って、古いボカロ曲の早口に挑戦したけど今日も無理で、疲れた来夏が曲を入れるのを止めて、好きなミュージカル俳優の半ナマ同人をネットで見つけてキレそう、みたいなどうしようもないお気持ちをだらだらと垂れ流して、たぶん来夏にとっては笑い話だったのだろうけど、ぼくはあんまり笑顔をつくれなくて、彼女が話すのにも疲れてきた頃合いを見計らって「別れよ」とぼくは言い、返事をされる前に「他に好きな人ができたから」と重ねたらさすがに彼女は一瞬黙り込んで、ぼくはこの二日間で練った作戦が奏功しているのを喜び、更に畳みかけるつもりで「と言うか、もうその相手と付き合ってるし」と嘯いたら、いつかと同じように奥底から自嘲気味の笑いが込み上げて、動脈に鳥肌が立って、なんとか堪えて呑み込んでふっと来夏の顔に視線を向けると彼女はこれまでに見たことがないぐらい目を丸くして、ぎゅっと結んだ唇が震えてラメが細かく輝いていて、涙が、滲む暇もなく溢れだし、顔を上げてしっかりとぼくを見つめたまま次第に嗚咽を吐き出して、ぼくは咄嗟に「ごめん嘘」と言っていて、本当にぼくには覚悟がないのだけど、ぼくは涙で壊れていく来夏が可哀想で仕方なくて、だったら可哀想とか思う前にさっさと死ねよクソババア。

病んでから恋人を、情緒を持て余してぐだぐだ生き延びるための道具としか使えない分際に生きてる価値なんてない。何も喋らずに死ねば良かった。せめて五階から飛び降りろ。せめて包丁で手首を切れ。そうすれば来夏は無駄に傷付かなかった。遺体を現世に晒したって家族でもない来夏には届かなかった。来夏の悲しみは今より小さく済んだかもしれない。どうせ死ぬんだろ。死んだらもう一回来夏は泣いてしまうんだよ。遠回りせずに死ねよ。

マンションの五階の通路に立っている自分を想像の中で俯瞰すると、そいつは死ぬより

恥ずかしく無様に生き延びようと泣き叫んでいる。手摺りにしがみついて号泣している。死ねない。シミュレーションですら死ねない。ぼくに芽生えた希死念慮はあの日、メンクリへ駆け込む直前に絶頂を迎えてすっかり萎びてしまった。どうせ死ねないのだ。以降のぼくは薬に頼りながら漠然と、運良く野垂れるまでは生き続ける。所詮その程度。所詮その程度だった。そんな人物をぼくは十年以上見てきたし、なんなら手を貸していて、ああやはりぼくは母の娘なのだ。あの下半身の産物なのだ。

思考が爆走しているぶん視界は闇に包まれているけど、首の角度を自覚することでどうにか俯いているのがわかって、ぼくは「ごめん、言うたらあかんタイプの嘘やった」と言ったけど、それはおそらく来夏ではなくぼく自身に向けられている。

「サキ、こっち向いて」低い声でそう言われて、久しぶりに来夏に本名を呼ばれた事実に白々しく喜びながら視線を上げると、涙を縷々と零し続ける来夏の顔が目の前にあって、頬を両手で挟まれて位置を固定されて、てっきり終末的なキスでもされるのかと思って目を閉じかけたのだけど次の瞬間に左頬へ平手が飛んできて、ぼくは初めて来夏にぶん殴られた。焼けるような感覚が表皮に走る点ではリスカと似てるけど、平手打ちは線ではなく面で痛みが広がって、何故かとても嬉しかった。

来夏は「マジで言うたらあかんやつ」と震えた言葉を吐きながらぼくの胸に顔面を衝突させ、悲鳴みたいに叫びながら、目だけではなく鼻と口も決壊させた。「なんでそんなひどいこと言うたん。うちがサキおらんと死ぬん知ってるくせに。うちがサキのこと一番知ってるもん。めっちゃメンヘラなん知ってる。うちもそやん。せやからうちめっちゃサキが好きなんやん」「うん」「来夏な、サキのこと全部知ってるもん」来夏は付き合い始めた頃から自分の名前を一人称にするのをやめようと努力しているけど、今でも興奮するとついついまろび出てしまう。「来夏、サキが廃課金勢なん知ってる。フレンド欄のプロフ見たらキャラコンプしてるのわかるもん。リスカかって付き合う前からやってたん知ってる。来夏しか近付けへん距離で見たら傷痕残ってるもん。最近メンクリ通いだしたんも知ってる。寝る前に隠れて飲んでた薬の名前、ネットで調べたもん」ぼくは上手く反応できないまま手癖のように来夏の背中を叩いていて、彼女は当然ぼくの惰性に気付いていて、寝ているときにしかできないような歯ぎしりをしてから「来夏、サキが仕事辞めたんも知ってるもん」と言って、ぼくは上手に釣られて「なんで」と返してしまった。来夏は「ビデオ通話。背景。サキの実家」と検索するみたいに言って、「変に思って、サキが帰ってくときに何回か追っかけたけど、行き先全部マンションやったもん」と、前彼の話をする

ときより遙かにためらいながら言って、ためらうということは来夏自身、それが異常行動だと気付いていて、ぼくもそう思うけど、同時に嬉しくて、ぼくはそれだけ愛されるために来夏の恋人になったのだし、それだけ愛されるだけの資格をずっとずっと持っていたかった。「優しいお父さんになりたいって言うたんが嘘なんも知ってる。でもあれはほんまにイヤやった。だって来夏よりサキのが傷付いてんの顔でわかったもん。嘘下手すぎ」「ごめん」「なんか衝動とかやなくてほんまに別れたがってんのかなって知ってる。でも別れんの無理。ずっと無理やけど今はほんまに無理。来夏も無理やけどサキかて無理やと思う。だって来夏、サキがまだ来夏のこと好きなんも知ってるもん。来夏の自意識過剰やったら申し訳ないけど、サキ、前彼の話、もう許しちゃってるように見えんねん。せやから無理。もうちょっとそれっぽいタイミングがきたらしゃあないかなって思うけどそれは今じゃないやん。無理やもん。来夏、サキ以外の女と付き合われへんから無理。来夏、来夏とサキと無理しか言うてない。もんもん言い過ぎ。語彙力ないしキモくてごめん」「うん、最後以外全部当たってる」ぼくだって、けどけど言い過ぎていて自分の言葉を自分で否定しまくっていて、今ではもうどれが本当の気持ちかわからないのだけど、そういう言い訳は本当の気持ちなんてものは存在しないという真実から逃げているだけなのだと思う。おそらく、メンヘラには二種類のタイプがあって、一旦依存した相手には思ったことをなりふり構わず言ってしまうメンヘラと、その場で言いたいことがあっても我慢してしまってあとで情緒が爆破したときに纏めて言い出すメンヘラがいて、来夏は前者だから大好きなのだけど、『優しいお父さん』設定を掘り返した来夏は後者なのかもしれなくて、それでも大好きなのは変わらないから、たぶんそういう愛情は、言葉にしたら全部嘘なのだろう。

「来夏たち二人とも激イタやんか。どっちも二十歳なって何年も経ってんのに『うち』とか『ぼく』とか、キツい関西弁とか。終わりや終わり。女として完全に終わり。そやから、来夏はサキと終わり続けたいんやんか」来夏はどろどろと言葉を紡ぎながら干涸らびるほど止め処なく泣き続けていて、液状の来夏がシャツに染み込み貫いて、表皮に湿りを感じた途端彼女の悲しみが伝播し、とても切なくなって涙を堪えるように目を強く閉じたら水がはみ出して、ぼくも既に泣いているようだった。「そやから、二人で生きていこ。な。いつか死ぬんやけど、そのときはちゃんと来夏も死ぬから、今は生きてこ。まだ二人でなんとかなるはずやからあ」

小動物のように震えだして何も言えなくなってしまった来夏を無責任に抱き締めながら、

ぼくは先人が何度も辿った思考過程を安直に反復していて、つまり好きという気持ちだけで生きていけたらどれだけ幸せだろうと舐め腐った理想に浸っていて、けれど実際の生活には賃金とか育った家庭からの自立とか事務手続きとかが必要で、そういう現実から逃げ回り続けているくせに好きとか嫌いとか、付き合うとか別れるとか考えあぐねるぼくはどう考えても来夏を幸せにできなくて、でも来夏は幸せにならなくちゃいけなくて、ぼくは本当は来夏本人の優しいお父さんになりたくて、来夏にはぼくの優しいお母さんになってほしくて、ぼくは来夏の命に責任を持ちたくて、来夏にはぼくの命に責任を持ってほしくて、けれどぼくはお父さんにもお母さんにもなれないし、他人はおろか自分にすら責任を持てない肉塊でしかない。

そや。早い方がええよ、来夏。メンヘラの視野は狭いから、来夏にはぼくしか見えてへんのかもしれんくて、それは嬉しいけど、たぶん来夏は他の女っていうか他の人とも付き合えるんと違うかな。たとえば来夏がコンカフェをやめて普通の正社員として働きだしたらぼくより長持ちするやろし、そしたらそこで良い人と出会える未来だってあるわけで、そやからこんなところで無駄な時間使ってる場合やないよ。生きてけるよ。どうせ生きてける。こんなクソ優しい世の中じゃあ癌になったってなかなか死なれへん。ぼくたちは最悪、離れればなれになってもそれぞれがあと三十年とか余裕で生きてもうて、いつまでも自分が若いと思い込み続けるんや。実際、三十五歳に「アラサーになってもアラフォーになっても何も変わらん」って言われてな、そいつだけじゃなくて健康な人なんてみんなそう思うもんなんやろけど、けど、そういうことじゃないやん。三十歳になったって何も変わらないから大丈夫やって、気付きたくないから三十歳なんかになりたくないんやんか。昔ラブホで来夏と将来の話をしたときは、お互いに同じ世界観で生きてたから、年取ったら死のうって約束したはずで、まあ全然忘れてくれてていいんやけど、そしたら、来夏はぼくより先に大人になってたんかな。精神年齢が違うようになったんかな。じゃあやっぱりぼくたちはこのへんで別れるべきで、そうしないと最後に手を振り合えるような円満な終わりを迎えることもできへんけど、ぼくはもう万策尽きてしまったし、それどころか来夏はぼくが死んでも守りたかった部分まで知っていて、それすら許してくれて、ぼくはもう他に来夏を傷付ける方法が思いつかなくて、来夏、ぼくが、レイとセックスでもしたら別れてくれる？

……そういうことをぼくは来夏に向かって声に出して言ったのかもしれないけど、言っていたとしてもカラオケルームの騒音の中ではほとんど掻き消されていただろうし、何よ

り彼女は言いたいことを言い尽くしてしまったらしく、ぼくの腹に顔を埋めたまま自分の世界に引きこもってしまって、おそらく来夏の脳内には理想化されたぼくがいて、彼女はそれを愛でるのに必死で、ぼくが話を聞いてもらおうと肩を撫でるたびイヤイヤしていて、ぼくは何も言っていないも同然だった。来夏はぼくより悪い運命を歩んできたせいで、ときどきフラッシュバックに見舞われることがあって、そのとき彼女はいつも見えない何かに耐えようとして、ぐるぐると喉を鳴らしながら全身に力を込めて固まってしまうのだけど、今の彼女はまさにそんな具合だった。来夏をこの世に産み落とした、感謝すべきだけど殺すべき両親と同じぐらい、今のぼくは彼女を苦しめていて、来夏の教義が正しければぼくは未来永劫、繰り返し繰り返し、彼女を痛めつけて許されてしまう。

「来夏」

無限に自分の人生が繰り返されるという発想はやっぱり来夏が初出ではなくて、かつてニーチェって哲学者が永劫回帰という大層な名前で唱えていたらしく、彼は人生を、考えられるかぎり最も虚無的で、人間が最終的に超克しなければならない試練だと考えていたようだけど、ぼくはそういう難しいことなんかわからないから来夏の感覚を採用したいし、偉い人にとっての虚無は来夏にとって最も理想的な逃避なのかもしれなくて、じゃあぼくはどうすればいいのだろう。

「来夏」

来夏の死生観が正しければ、ぼくたちは若さが終わっていく数年間を一緒に過ごせるから幸福だけど、生まれてすぐ亡くなってしまった赤ん坊は生まれてすぐ亡くなってしまう運命を永遠に繰り返すことになるし、親から壁に投げ飛ばされて打ち所が悪かった子どもは虐待しか知らない人生を歩み続けることになるから、あまりにも救いがないのだけど、キリスト教にだって洗礼を受けずに死んでいった子どもは天国に行けないという考え方があるようだから、そもそも死生観なんて自分本位の権化みたいなものなのだ。

「大丈夫」

ニーチェは「神は死んだ」と言っていたそうだけど来夏は神を信じていて、どちらが真実かは知らないけど、来夏の方が正しいに決まっているけど、彼女が信じている神というのが本気でぼくのことなのだとしたら、そんな神は今すぐにでも消えるべきなのだけど、この神は所詮一度死のうとして失敗しただけのカスだし、小説なんてものを諦めてしまった今のぼくなら「神は死にたかった」とか「神は死ねなかった」みたいなゴミパロディがお似合いなのかもしれない。

「嫌わないから。大丈夫」

今のぼくが『生存限界』を書いたらきっと『プラネタリー・バウンダリー』なんて大袈裟なルビを振らず、『圧縮された宇宙』が込められた砲弾をカッターに、地球をぼくに、少女を手首に置き換えてしょうもないリストカットの物語にしてしまうだろう。言いたいことはさして変わらないくせに、自意識を表現する装置を大幅に縮小させてしまうのは、その程度がぼくの、本当の生存限界だと知ってしまったからで、もし来夏が読んだのが劣化版だったら、彼女はある程度面白く読んでくれたかもしれないけど、ＤＭを送るほど熱烈に推してはくれなかっただろう。

「来夏、愛してる」

来夏がフラッシュバックから立ち直るにはいつも一時間近くかかるから、ぼくは死後硬直のように身をこごめた彼女の身体を溶かすように撫でながら、何度も何度も空虚な思い遣りを聞かせているうち、ぼく自身も次第に自分の世界へ入牢して、残響のように痛み続ける左頬を撫でつけ、いつまでも流していたかった涙が引っ込んでいくのを惜しみながら、せめて来夏の中にいるぼくが永遠に美しいままであることを、彼女が信じているのとは異なる神様に祈っていた。やがてぼくを仰ぎ見た来夏の顔は涙と鼻水と唾液でぐちゃぐちゃになっていて、ＭＶを放映しているディスプレイの巨大な光を反射して陰影を強調させながら、とても純粋に輝いている。「ありがとう」と言った来夏の両腕を取って首筋まで持ち上げたら彼女はそのままむしゃぶりつくようにぼくに抱きついてきて、ぼくは絞め殺されたかっただけだったのだけど、ぼくはぼくが嫌いなタイプのメンヘラだから本心なんて少しも声に乗せられず、そのくせ来夏の甘やかな許容と感謝を心底から受け入れることもできず、結局目の前の現実が幸福だろうと不幸だろうと否定したがるのがメンヘラの、いやぼくの性根なのだ。

感謝されるしか能がない人になりたくなかった。

9

ぼくは駅前に立っている。

ワイヤレスイヤホンの接続の調子が悪いのか、適当に流している誰かもわからないアーティストのトラップミュージックがたびたび寸断され、その不具合は発病して以来集中力を欠くようになった情緒とよく似ていて、ぼくが所有している思考回路はいつまでも句点

が来ない感じで答えが出ないまま延々と巡り続け、離脱症状に苛まれているときはますますひどくなっていて、メンヘラは自分の症状をネットで調べて疑わしい情報を漁るのが好きだから、こういう現象に当て嵌まる症状の名前だって推測できているけど、所詮は雑学レベルの浅知恵だから間違っている可能性も十分あるし、仮に合っていたとしても、虚しい名前を授かったところで快復の役には立たないし、ぼくがゴミ人間である事実も変わらない。

ぼくは呆然とデジタルサイネージを見ている。

この前はクリスマス仕様だった拡張現実の広告は年末仕様に変えられているけど、相変わらずぼくの姿は無許可で取り込まれていて、やたらと線が細く見えるトレンチコートから伸びているゴミ顔面の上に来年の干支であるらしいウサギの耳が乗っけられているけど、ぼくはそれよりも長くなりすぎたせいで暴れだした毛先が気になって、今では来夏と同じぐらいまで伸びている髪の毛は、就活を始める前まではスポーツ刈りよりも少し長いぐらいだったけど、彼女と相談して普通を装うことにしたけど、たった数センチ成長しただけの髪を制御できずに何度も来夏と美容師の手ほどきを受けたけど、未だに慣れていない。

レイがやって来る。

昨日、来夏を抱えるように支えながらカラ館を出てアパートまで連れ帰って、到着した頃にはすっかり仲直りしていたはずだけど、彼女は精神的に極限まで疲弊してしまっていたうえ、次の日にはコンカフェのカウントダウンイベントに参加しなければならなかったから、ずっとそばにいることはできなくて、ほんの少し滞在して夕飯をつくって、ぼくは来夏が何か物思いに耽っているのに気付いていながら逃げるように帰り支度をして、微かに落ち着いた笑顔に見送られながらアパートを出て、その帰り道にＤｉｓｃｏｒｄでレイと連絡を取った。

レイに目線だけで会釈して、ぼくは率先して雑踏へ歩きだす。

両親との惨憺たる団欒について追及されるとでも思っていたのか、レイは文面だけでもわかるほど怯えていて、彼女にとってぼくの振る舞いは、もしかしなくても脅迫に映っていたに違いないけど、ぼくの中には彼女が思うほどの確たる悪意は存在しないし、むしろ自分が何を考えてレイと会おうとしたのか未だに確定していないし、それどころか、三次元の彼女を一目見ただけで苛立ちが募って半分無視してしまっていて、それは紛れもなく自分に向けるべき苛立ちだ。

キャッチを頼らずに自力で空いている居酒屋を見つける。

ぼくは、来夏への未練を断ち切るために今度こそ破綻を兆したセックスに誘い込もうとしているのかもしれないし、ただ単にレイを見下したかったのかもしれないし、いずれにしてもぼくは彼女の主体性みたいなものをまったく尊重していなくて、尊重しなくてもかまわないとすら思っていて、最初から彼女の好意を道具として使っていたぼくが今更反省する方が不誠実だと居直ってさえいるから、今日だってそもそも彼女と面と向かってまともに会話を交わすつもりすらない。

対面で座って酒だけ注文する。

ぼくはレイをどちらの性別で認識するか未だに迷っていて、おそらくそれは三次元での彼女の存在感が二次元のそれにまったく到達していないからだけど、彼女もぼくの認識に逡巡しているはずで、本当にどちらでもいいのだけど、二十三までこんなスタイルを貫いていたら拘りが強いタイプだと思われたって仕方がないから文句をつけるつもりはなくて、正直なところ、短髪とか一人称とかを身につけた理由はあんまり憶えていないから、今となってはいくらでも妄想できて、少年マンガの影響かもしれないし、ぼくを放置するようになった母に対する反抗気味のアプローチだったのかもしれなくて、一つだけ確実なのは、この人格に目覚めてからぼくは母からだけでなく中学や高校でも無視されたり虐められたりするようになって、それでも不気味な頑固さでキャラを守り続けていて、たぶんそれは素の自分に戻ったらもっと酷い目に遭うって妄想が関係しているんだろうけど、同級生の知るところではない話だからただのイタいクソ女だったし、そういう地獄で一生過ごす羽目になるんだろうなと薄々諦観していたけど、大学に進んで人間関係が整理されたタイミングで急に来夏みたいな最高の恋人ができて、彼女との過保護な宇宙に耽溺していたから、ぼくは中庸な環境を知らないままここまで来てしまった。

「わたくし、サキさんが何を考えているのかわからないんですよ……。……今日も、わたくしのことなんか気にも留めてませんね。それならそれで構いませんが、わたくしは誤解を解いておきたいのです。その結果サキさんからますます嫌われるようになったとしても仕方ありません。ただ、勘違いされたままでいるのは本意ではありませんから」

いずれそういう宇宙にいるうち、来夏がそんなぼくを好いてくれたこともあって、思いつきに過ぎなかった言葉やファッションによる扮装がアイデンティティとして固着したのだけど、生き方として貫き通すだけの強度はどこにもなくて、社会に出なければならない実感に迫られてから、頑張って自分をわたしって呼ぶようにして、就活中の面接みたいな丸暗記の自己紹介ぐらいはなんとか乗り切っていたんだけど、やっぱりすぐに呼び名を直

すなんて無理で、特に臨機応変な対応力を求められる場面では毎回面白いぐらいに間違えてしまって、笑われて、怒られて、肩を叩かれたり背中を撫でられたりして慰められて、たったそれだけで全部無理になって、疲れているのに眠れなくなって、ぼくは来夏の「わたしは他の人と一緒で近付いてもおもんない存在ですよ、ってアピール」というアドバイスを、もっと早くに、できれば中学生の頃には学んでおくべきだったのだろう。

「わたくしの家は四人家族なんです。二つ上に姉がいまして。今となっては姉弟揃って手帳持ちなのですが、両親としてはわたくしの方に期待をかけていたらしく、幼少期から凄まじいスパルタ教育を受けてきたのですね。ずいぶんと殴られ蹴られ、したものでした。ですからわたくしも正当防衛として反撃することもあったんです。そういう青春時代を送ってきたものですから、まともな進学や就職なんてできるわけがありませんでした。けれどもあるときを境に急に両親は優しくなって、わたくしの生活に介入しなくなりました。確かそれはぼくが三回目の就職をして、一週間ともたずに辞めてしまった時期と重なっていたはずです。そのときは両親が、ようやくわたくしが抱えている困難さを理解してくれたのだと、純粋に思い込んでいました」

最も死に近付くことができた二ヶ月前の朝の出来事を、ぼくは主観ではなく、ありふれた臨死体験みたいに自分の姿を真上から眺望するような視点でしか思い出せなくて、ベッドから起き抜けたぼくはすぐ洗面所に行き、洗面台に転がっていたドライヤーのスイッチを入れて、無意味に温風を吐く機械をじっと見つめてから放置して、台所に向かい、自炊を決意して買い揃えたけど結局ほとんど使わなかった包丁を取り出して、ベッドに戻るとスマホのアラームが鳴り続けていて、心の中には上司への憎悪も来夏への名残惜しさもなく、あったのは早く職場に行かなければならないという焦りだけで、頭の隅で着替えのシャツのこととかを考えながら刃先を左の手首にあてがって、そのときばかりはリラックスするためじゃなくて死ぬために切ろうとしていたのだから、青い血管に沿って切り開くように裂けば死ねたのに、横に裂くにしたって動脈まで届くように深く突き立てたら死ねたのに、ぼくは当然のように日和ったから中途半端に切ってしまって、それでも明るい血液が止め処なく溢れ出していて、記憶の中のぼくは赤く濡れていく腕を呆然と見下ろしながら、朝日が放つ、外の景色を塗り潰すほどの激しい輝きに塗り潰されそうになっているのだけど、実際には部屋の窓は西向きだったからそんな強烈な光が届くはずもなくて、ぼくはちゃんと死にかけることができた瞬間を無意識下で美化してしまっているのかもしれない。

「あの日、姉がうるさくしている……という母の声が聞こえていたと思います。姉は五、六年前に結婚して家を出ていたのですが、今年の初めに離婚して帰ってきまして、それから……壁越しに聞こえるほど大きな喘ぎ声を頻繁に出すようになったんですね。何をしているのかはわかりません。単純にアダルトコンテンツを消費しているのかもしれないし、或いは自らをアダルトコンテンツとして実況配信しているのかもしれないし、わたくしのように、ネットの知り合いと通話しているだけなのかもしれない。いずれにしましても事が事ですから、誰も姉に真相を聞き出せないのですね。厄介なのはそのような騒音以外の点で姉は以前よりもずっとまともになってしまっているということなんです。家を出る前の姉はわたくしよりも遙かに暴力的だったのですが、最近はすっかり鎮まっていて……」

傷口は神経まで至っていなかったから普通に動かせる左腕で、延々とアラームを鳴らすスマホを取り上げたとき、ぼくはアルコール消毒するような手軽さで救急車を呼びつけていて、電話越しに聞こえてきた止血方法を実践するために立ち上がって、通話が途切れたとき、その勢いでぼくはスマホの電源を切っていて、たぶんそれはいずれ押し寄せるであろう職場からの電話攻勢から逃げようとする防衛本能が働いたせいで、そういう親譲りの賢しらさは、ぼくが他人に迷惑をかけるタイプの公害まで落ちぶれてしまったと自覚させるのに十分で、何故そうしてしまったのか考えたくないけど、無理矢理考えるとしたら本当に死ぬつもりなんてなかったとしか解釈できなかったから、次に死ぬときは自傷から地続きの死に方ではなく確実な死に方を選ぼうと心に決めているのだけど、どうやらそれも無理らしい。

「家族……特に両親としましては、ですね。今となってはもう姉の治療なんて望んでおらず、ただただ平穏な日常が続けばそれでいいわけです。姉が最初に発病したのは十五の頃で、それから二十年以上が経過しているわけでして、両親はもう七十近い。娘と正面から向き合う体力なんてどこにもありませんから、大声で喘ぐ娘を日常だと受け入れる方向で努力しているのですね。だから姉が部屋で奇声をあげたって何も言わない。部屋から出てきた姉とはニコニコ話している。そうやって両親が姉に対して甘く対応するのを目の当たりにしましたとき、わたくしは初めて、ここ十年ばかりのわたくし自身に対する両親の扱いを客観的に見た思いがしました。要するにですね、姉を諦めてしまったように、わたくしはとっくの昔に諦められていたわけですね。だからですね、働けとも、結婚しろとも言われなくなったわけです。わたくしは思うわけです。ふざけるな、と」

罪深い傷口を形成外科医は丁寧に縫合してくれて、ぼくがそれまで精神系の病院の世話

になったことがないと知ると、少し驚きながら、初診の予約が必要ないメンクリを紹介してくれて、それからどのように事が運んだのかはっきりしないけど、気付けばぼくは休職してすぐに退職を選択していて、ぼくは泳ぎ方を忘れてしまった魚みたいに現実を揺蕩うことしかできなくなってしまっていたから、会社に籍を置いているという概念だけで気持ち悪くなってしまって非合理的な道を選んでしまったのだけど、そんな役立たずを来夏が受け入れてくれると当時は全然考えられなくて、ぼくは一瞬でもこの生き方を、人生のレールを外れてしまったら彼女が愛してくれなくなるというような、根拠はないくせに切羽詰まった悩みにずっと付き纏われていたから、少なくとも家賃補助を受けて借りていたアパートから引き払ったあと来夏に頼る選択肢は浮かばなくて、帰る場所は実家しかなかったのだけど、敗残者となったぼくを一〇三号室に迎え入れてくれた母の笑みは神々しいほどの慈愛を宿していて、あのときぼくは信じられないほど、来夏にも見せたことがないほど号泣していて、もしかしたら母の胸に飛び込んでいたかもしれなくて、その激情はかつてまだぼくが母を、殴られながらも愛していた頃に身につけた、因果のような愛着のリフレインだったのかもしれなくて、だからそれ以来、ぼくはぼくの涙を信用していない。

「これまで勝手に期待されて勝手に諦められて、謝罪の一つもなく半笑いで済ませようとしているのは許せません。ですからわたくしは心に固く誓ったんです。こうなれば最期まで寄生してやろうと。今の時代は一生かけても消費できない量のコンテンツがネットに転がっていますから、家と金と、そこそこハイスペックなＰＣさえあれば暇潰しには困らないわけです。そういうもので両親の財産をとことんまで磨り潰してやろうと、わたくしは決めました。わたくしは虐待サバイバーですから、そうする権利があるんです。今では向こうから小遣いを持ってくるようになりましたが、これも一つの成果です。わたくしが昔の姉のように暴力をちらつかせれば、本当に暴れなくとも、両親は言うことを聞きますからね。つまりサキさんに勘違いしてほしくないのはですね、あのときのやりとりは、溺愛する両親と甘やかされた息子に聞こえたかもしれませんが、実際には真逆であると、そういうわけなんです」

病んだあとに待ち受けていた世界は異様なほどぼくを甘やかしてくれて、来夏は相変わらず優しかったし、メンクリで担当してくれている母親と同い年ぐらいの先生はぼくがどれほどザコい弱音を吐いても「大変やったねえ」と暖かく慰めてくれて、空き時間を確保したぼくはネットでもそのような応援を探すようになっていて、ただスマホを眺めているだけでも励ましてくれる言葉には大抵、それまで馴染みのなかったカタカナの名前がつい

ていて、さほど苦労せずにぼくと来夏の関係性や、ぼくの腐った根性を全肯定して世の中に責任転嫁してくれる文言が見つけられて、生きづらさを代弁してくれる演説の動画や記事はリスカと同じ瞬間的な陶酔を与えてくれるのだけど、よくよく考えたらそういう誇張されたエールは目の粗いザルのようなもので、ぼくみたいに矮小な個人は毎回掬いとられずに零れ落ちてしまうから、どれだけ待ち侘びても救われないまま、期待ばかり持たされるのだけど、そんな不平不満は誰に対してでもない救いに誰に対してでもない怒りをぶつけている、無駄に無駄を掛け合わせるような行為に過ぎないし、そもそもこの考え方は根本的に誤っているのかもしれなくて、だってぼくには来夏という最大級の救いがあるじゃないか。

「わたくし、いつからか自分がガンマ線みたいな存在だと思うようになりましてね。ありますでしょう、ガンマ線。見えない光。見えないくせに人体に悪影響を与える有害な光。気をつけて取り扱わなければならない光。そのように自嘲してしまう理由だって両親の虐待に起因するのは間違いないのですが。ですからわたくし、ネットではずっとガンマレイって名前で活動していまして。バ美肉界隈でも同じ名を使おうとしていたのですが、でもほら、ガンマってなんだか男っぽい響きでしょう。だから外しまして、レイと名乗るようになったんです」

たぶん今ぼくは自分自身ではなくレイのことを考えていて、彼女の声が思考に混入したから錯綜が起きたはずで、そういう気付きとどちらが先だったかはわからないけど、無視し続けるぼくに痺れを切らしたらしいレイが放った「わたくし、サキさんが女性だって、会う前から知ってましたよ」という挑戦的な暴露に、ぼくは簡単に食いついて鋭く彼女を見遣ってしまっていた。「ボイスチェンジャーを上手く使っていたとしてもですね、地声の性別はわかってしまうんですよ。わたくしのような声の持ち主がどれだけ調整したって、絶対にサキさんみたいな声は出せませんから」「……偏見ですよ」「姉の件もあって、わたくしは本当に女性というものが苦手なんですね。けれども界隈では女性でいる方が受け入れられやすい。ですから、正直に言ってぼくはサキさんが本当に羨ましいんです」「レイさんは、男に見られたいんですか。女ですか」「どちらでもいいですよ。本当に、どちらでもいいです。存在しているだけで害にならないのであれば、どちらでも」泡沫のような途切れ途切れの会話を交わすうち、モザイクがかった視界が徐々に鮮明になってぼくはようやくレイの、前回と寸分も違わない服装や顔面を認識したけど、相変わらず不愉快な浮遊感に包まれていて現実に生きている感覚を取り戻せないまま、ぼくはおそらくレイを

力なく睨みつけている。

高校を卒業するまでのぼくは自分を地獄の住人だと信じて疑っていなくて、来夏と出会って天国に引っ越せたのだけど、来夏が案内してくれたのは天国だけじゃなくて、彼女はこれまで、ぼくが地獄だと思っていた世界より更に下の、底の底で生存してきていて、ぼくはぼくの不運や不幸が圧倒的に馬鹿馬鹿しく思えてきて、実際に来夏と比べれば圧倒的に馬鹿馬鹿しいのだけど、そんな真実を突き付けてくるのは彼女だけで十分だった。

さっきまでレイが目の前で垂れ流していた内容を胡乱ながらも思い返して、ぼくが気に食わないのは、彼女が持つ生い立ちや怨嗟に対して一定以上共感してしまうことであり、それはたとえば幼少期の虐待とか頭脳に対する過大な期待とか親に対する幼稚な復讐心だったりで、レイが当初目論んでいた以上のクズであることにぼくは喜ぶべきなのかもしれないけど、要所要所にトラウマを惹起するワードが散りばめられているせいで自分事としか考えられないようになっていて、二十三と三十五は同じ中年としてカテゴライズしなければ理屈が一貫しないけど、ぼくは性別以上に年代での隔たりを感じてしまっていて、だからこそ彼女の方が真に零れているのかもしれない。

この世界は新しい不幸が既に不幸な人に集まるようにできていて、そのスパイラルの中に来夏やレイはいるけど、この世界は性格の悪い人がますます悪化するようにもできているから、仮にぼくが来夏と一緒に生き延びたとしても、遠からずやって来る分岐点で彼女と別れてレイの方向へ突き進むことになってしまって、ぼくは今のレイみたいに自分に降りかかった不幸を全て他人のせいにして開き直るようになって、口ばかり動かしながら何もしない日陰者に成り下がって、そうなればぼくもレイと同じく見えない光になるから永遠に救われなくなるはずで、救われたくないからそれでいいはずなんだけど、今のレイを見ていると不安にしかならなくて、ぼくには彼女が救われたいと思っているか、或いは既に救われていると必死に錯覚しようとしているようにしか思えなくて、それは傍から見れば惨めな悪あがきでしかないのだけど、確固たる他罰思考を身につけてしまった彼女にとってこの世を生き抜く方法が別にあるとは思えない。

救いは救われない人にこそ訪れなければならないはずで、見える範囲の光すら簡単に零れ落ちてしまうとすれば、いったい誰がレイを救えるだろうか、と疑問に浮かべるのは見える範囲に留まっている者の傲慢だろうか、と考えること自体が無為なのだから囚われないように、かつて母のヒステリーに付き合おうとしなかった父のように、関わらないように努めるべきなのだろうか、と甚だしく合理的な結論に達したところで、いつの間にかテ

ーブルの上に裏向けで置いていたスマホが震えた。
レイを黙殺したまま取り上げて確認すると『来夏が写真を送信しました』と無機質な通知文が記されていて、ＬＩＮＥを起動させると自動的に彼女とのトークルームへ遷移して、識別する前にタップしたら送られてきた画像が拡大されて、おそらくそこはコンカフェのバックヤードで、背景に充電ケーブルらしいぼやけた黒線が散乱していて、中央部にアームカバーを脱いだ来夏の真っ白い左手首が、樹皮を剥いた幹のように映し出されていて、そこにささやかな引っ掻き傷のような線が一本横に引かれて血の粒が小さく浮いていた。そうか、ぼくは来夏の心ではなく身体を、あの白い肌を傷付ければ良かったのか、と妙に冷静に悟ったのだけど、続いてサムズアップの絵文字が届き、一つだけだったから大きく表示されていて、それを見た途端にＶＲのゴーグルを外したときと同じ、五感が解放されるような不快感を覚え、急に寒くなって、思わず「いやだ」と漏らして反射的に電話機のアイコンを連打したら瞬く間に『応答なし』が五行並んだ。もう三行追加してから、客席にスマホを持ち込めないコンカフェのルールを思い出したけど、諦められなくて更に何行か付け足していくうち、バリバリと音を立てるような痛切な実在感とともに、鼓膜が靄がかった騒々しさを、皮膚感覚が木張りの椅子の冷たさを捉え、ピントが合う範囲が広がって、画面全体の情報が雪崩れ込んできて、右上の時刻は午後十時を示していて、レイと落ち合ってから四時間が経っていた。
鈍った脳を必死に回転させて二百四十分の空白を埋めようとするけど、どう繋ぎ合わせても上手くいかなくて、目の前にある巨大なジョッキにハイボールらしき琥珀色の液体が半分ほど残っているけど、それが何杯目のものかわからないし、小皿に使いかけの割り箸が置かれているから、固形物を胃に放り込んだのも間違いないようだけど、いくら内省に沈んでいたにしても意識が吹っ飛びすぎていて、薬を飲み忘れた可能性や逆に飲み過ぎた可能性が思い当たったけど、それよりもぼくは来夏のことを考えなければならなくて、彼女が自傷してしまった理由を解かないといけなくて、鍵付き個室でレイプしたからかもしれないし、『優しいパパ』設定を口にしたからかもしれないし、同棲から逃げ惑っていたからかもしれないし、カラ館で最低の嘘をついたからかもしれないし、来夏が追い詰められてしまった理由は無限に思いついて、いずれにしてもぼくのせいであることは確定していて、本当は今すぐにでも来夏のもとに駆けつけたいけど、それは身勝手でしかないから、まずぼくは彼女の自傷に相当するだけの報いを受けなければならなくて、早くしないと来夏がぼくみたいになってしまうから、ぼくはぼくの覚悟とか躊躇のために時間をかけるわ

けにはいかなくて、目的地が定まらないうちに腰を浮かせて、斜め前に踏み込もうとして、左足で右足に躓いて姿勢を崩したら、それまで木目の背もたれに撓垂れていたレイがふっと身体を起こしてぼくの両肩を支えて、ぼくはぼくを罰し、そうすることで来夏に罰されなければならなくて、自傷や自殺では少しも贖えないから、死よりも悪い刑罰を受けるために、彼女の耳元に向かって「ホテル、行きましょう」と囁いたところで、ぼくはようやくある程度の平静を取り戻した。

至近距離にあるレイの目は今にも腐り落ちそうなほど生気を失っているけど、力強く据わっているようでもあって、ぼくも同じような視線を彼女に投げつけているはずで、どちらともが隠しきれないアルコールの臭気を漂わせているせいか、まるで鏡を見ているような気分になり、おそらくぼくたちは競い合うように暴飲していたのだろう。レイがいつ頃から露悪的な告白を始めたのかわからないけど、それだって酒の力を借りなければ成し遂げられなかったはずで、もしかしたらフルネームを明かしてしまったときみたいに、彼女にそのつもりはなかったのかもしれなくて、ぼくはぼくに触れているレイの腕を掴んで返事を待っているのに、彼女は一言も発しないまま濁った双眸でぼくあたりの空間を見つめていたけど、ぼくがもう少し身を乗り出そうとした寸前に突き放すように立ち上がって、腕力を込めながらぼくを遠ざけたけど、枯れ葉のような手のひらはいつまでもぼくの肩甲骨に触れていて、抱き締めようとすればいつでもできるはずだった。

１０

精算を終えて店を出ると、年末の人混みが、少し緊張しているように見えた。

身体の方は内臓がごっそりと抜け落ちたように乾いて軽くなっているのに、焼き切れた脳味噌だけがやけに重い。ぼくとレイは互いを介護するように寄り添っていた。ただの肉塊みたいに自発性を見せないレイを引きずり、どうにか舵を取って二つ先の筋を目指して歩きだす。支え合いながら進むぼくたちに、たむろしている群衆が行く手を明け渡し、代わりに好奇の視線を寄越してくる。肩を貸し借りして初めて、レイの背がぼくより低いことに気付いた。

時間をたっぷりとかけて大通りから横道に入ると一気に通行人が減り、冷気が肌を刺した。余計なことを考えないよう、腿から下の動きだけに集中する。風俗店が密集する路地。

異様な叫喚と重低音がそこらじゅうの壁を貫いて響き、吐き気と頭痛が加速する。電柱に寄りかかっているハイヒールの女の子が一瞬だけこちらを見遣り、すぐ手元のスマホに視線を戻した。

ぼくたちは一言も交わさずにホテルが立ち並ぶ街路に到着した。秘密めいた二人連れがそこかしこに見当たる。手近なホテルに入るために首を上げて見回すと、思わず動きが止まった。建物から突き出ている看板にオレンジ色のネオンライトで『リマインド』と書かれている。おそらくただの系列店なのだろう。それでも奥底から心地よいほどの自罰感情が湧き上がり、自然と痙攣した頬に引っ張られて口角が吊り上がった。

無人のフロントで手早く部屋を選んで機械が吐き出したカードキーを受け取る。来夏と一緒に訪れたとき、手続きはいつだってぼくの役割だ。だから、自分が嫌いになるほど手慣れてしまっている。来夏もぼくを嫌ってくれますように。

エレベーターを使って三階に上がり、運良く無人だった廊下を急ぎ、部屋に入る。扉が閉まった瞬間、入り口にある精算機の隣で、レイは突然力強くぼくを抱き寄せた。両腕を強く結んで輪をつくっている。抱きつくというよりは全身をぼくに押しつけているようだった。恐怖と後悔と嫌悪と諦観と、ほんの少しの受容。けれどそれらしいアプローチは一瞬で終わり、レイはすぐに身体を剥がした。彼女の視線は部屋の奥のダブルベッドに向いている。帰巣本能を発揮させたみたいにふらふらと近寄っていった。そばまで歩き着いてから蹴躓くようにシーツへ飛び込み、そのままの勢いで転がり、向こう側へ落ちそうになる寸前にピタリと止まった。

レイの体臭から解放されて、消臭剤の香りが怖ず怖ずと這い上がってくる。ラブホテルの匂いはネットカフェと似ている。それまでに存在していたかもしれない汚いものを払拭する匂い。自ずと汚いものをあれこれと想起させる匂い。

ぼくは未だ曖昧な足取りでなんとかベッドへにじり寄ってレイを見下ろした。彼女はぼくが見ている前で寝返りを打って半分だけ大の字になった。左の手足は垂れ下がっている。浅く息を吸ってから時間をかけて吐き出すのを繰り返している。気絶するように眠り込んでいるようだった。

ぼくは外套を着たまま静かにベッドへ乗っかって寝そべり、真ん中あたりに投げ出された彼女の手に指を絡めて繋ぐ。それをセックスだと思い込むのは割と簡単で、喉元まで迫り上がってきた胃液が証拠だった。手指に集中すると僅かな血の流れを感じられたけど、心配になるほど冷え切っていた。ここまでの過程でレイが何を考えていたかわからない。

ぼくが何を考えていたのかもわからない。けれど彼女の手を取る行為はぼくにとって、精一杯の接近であると同時に拒絶なのだろう。

ポケットが微かに震動したのを感知して、ぼくは左手を、自分から繋いだくせに振りほどき、スマホを取り出した。来夏からのメッセージ。『好きの真似ーーーーー！　うちと好きは一緒やから！』という能天気な文章はさっき送った画像の説明をしているらしく、来夏特有の、いくつかの段階をすっ飛ばした突飛なテンションであるようにも見えるけど、ぼくには接客している来夏を妄想して嫉妬して『応答なし』を並べた過去が数度あるから彼女の対応は的外れどころか大正解で、続いて『明日は一生初詣でしよな』という文面がハートの絵文字付きで送られてきて、ぼくの頭に来夏への愛情が氾濫したのだけど、来夏への愛を想起することは自分に正直になることと同じだから、ぼくはようやく平時の思考を復活させられたのだけど、そうするとぼくはこれまでの所業を顧みないといけなくて、自分が何をしようとしていたのか本当にわからないのだけど、客観的に順序立てるとすれば、ぼくは男をラブホテルに誘い込んでセックスを試みて、失敗したばかりなのだ。

来夏はぼくのことを全部知っていると思い込んでいて、そんな彼女の情緒は最大限尊重したいけど、来夏が知っているのはリスカ痕とか鬱病みたいな物語にしやすい事情ばかりで、ぼくはそれだけではない、いかにも人間みたいなリアルでグロテスクでどうしようもなく泥臭い領域にも存在してしまっていて、それはたとえばぼくが母親の財布からたびたび万札を抜き取っていることだったり、嫌悪感だけで休職ではなく退職を選んでしまったことだったり、軽々に正式な診断を受けたせいで生命保険を加入するのも断念しなければならなくなったことだったり、レイと『リマインド』に来てしまったことだったりして、そういう汚い現実を明け透けに晒したら来夏はぼくを切り離してくれるかもしれないけど、たぶんその懺悔は自殺するよりも難しくて、それはやっぱりぼくが来夏を愛しているからというよりは、来夏を愛しているぼく自身が好きで好きでたまらないからなのだと思う。

何か長文を返そうとしたけど指に力が入らなくて、来年もよろしく、みたいなスタンプだけ送って、ベッドから立ち上がったぼくにはもうレイとセックスするつもりなんか更々なくて、逆にセックスという単語を頭から追い出すのに必死なぐらいだったのだけど、部屋に入ってしまった以上は立ち去るという作業をこなさなければならなくて、話しかけたところで返事するはずもないレイを見遣ると、彼女のパーカーの袖口がめくれていて、そこにすっかり白くなった細い傷痕が何本か走っていて、ぼくは衝撃を受けたのだけど、彼女が自傷しているのはある意味で当然なのだ。リストカットを広めたと言われている女の

子はぼくが生まれる数年前に死んでいて、つまりリストカットが市民権を獲得してから二十年以上が経っていて、むしろぼくの方が時代遅れなのかもしれないけど、脈々たるメンヘラの系譜に自分がいるのは間違いなく、果たしてレイはぼくにとってルーツであり行き先であり、そう確信するたび訪れる押しつけがましい怒りがどうしても制御できない。

シーツの網目まで見定めるように目を細め、あるはずもない忘れ物を確かめてから踵を返そうとしたけど、最後にもう一つ、レイのパーカーのマフポケットから折り畳みの財布がはみ出しているのが目について、札入れには万札が八枚以上詰め込まれて分厚くなっていて、いつの間にかその財布は、ぼくの手の中にあった。

すぐにレイが両親と喋っていた声を彷彿として、会ったこともない父母の姿が克明に浮かび上がってくるような気がしたけど、何の意味もないし、今ぼくの頭によぎっている衝動はどのような形でも擁護されないはずで、もしかしたらぼくは母の財布から何度も金をくすねているうちにいつしか依存症になっていたのかもしれなくて、ほら、ぼくはそうやってまた都合の良い言い訳を探そうとしていて、ぼくは患者と被害者を名乗ってそれ以外の蔑称から逃げ惑っているだけなのに、さっきの居酒屋はぼくが精算したからその分は仕方がないだとか、同意もなく抱きつかれた慰謝料ぐらいは貰ってしかるべきだとか、しがない弁解が無数に混合し始めたのだけど、挙げ句の果てに一枚引き抜いたときの思い切りは、カッターナイフで手首を切るときの、偽物の覚悟とよく似ていた。

カードキーをレイの手に、財布をシーツの適当な位置に置いてから扉を出て、直線なのに迷路のように見える通路を小走りで突っ切ってエレベーターで一階へ戻り、もどかしい速度の自動ドアを抜けてから、ちょうど目の前に止まって中年カップルが降りてきたタクシーに乗ると、香水の臭いが欺瞞のように強かった。素面を装っているような口調で行き先を告げシートベルトをして、尾を引いて流れ出した種々の人工光を、視界がモノクロに粟立つまで見つめている最中にふと、来夏が自傷してしまった本当の理由に気がついて、それはぼくが自傷してしまったから以外にありえなくて、もう少し早く気付いていたらぼくはレイの財布に手を出さなかったし、そもそもホテルにも行かなかったはずで、何故ならぼくの被害妄想とは違い、来夏が示そうとしたのは叱責でも病みでもなくて連帯だったからなのだけど、それが本当につらかった。来夏は相変わらずぼくを理解し許容してくれていて、その気持ちは一度だって変わらなかったのに、ぼくばかりが捻じ曲がって、中途半端な裏切りを重ねて、確実な犯罪にさえ手を染めたのに、死のうとするだけで全てを解決しようとしていて、そんな希死念慮は自己の存在すら擦り付けるような醜態だと、ぼく

は母親を通して知っているはずじゃないか。

死に時を逃してしまったぼくは、いつの日か、あの頃死ねなかった自分自身を緩やかに肯定するようになってしまうのかもしれないし、或いは死ねないまま生き続けて、やがてどこからともなく現れた我が子に情動のケアを押し付けるのかもしれないけど、いずれにせよぼくの未来には悪辣の再生産が待ち受けていて、だからぼくはどんな形であれ親という身分に立ってはいけなくて、今のぼくは自虐する自分しか許せないから、こうやってまだまだ自虐していたかったのだけど、赤く輝きだした信号機に向かって車が滑らかに減速したせいで胃袋が揺さぶられて、うしろに流れるばかりだった景色が急にクッキリと浮かびあがり、視線の先、フェンス越しの歩道に、水色とピンク色と黄色の蛍光ペンをぶちまけたような、ド派手なブルゾンの背中が歩いていた。

崩れるようにゆっくりと歩を進めて去っていく後ろ姿は、瞬く間に五階の通路を歩く背格好と重なって、ぼくは心の中でお母さん、と叫んでいて、一度母だと認識してからは、もうそれ以外には見えなくなってしまっていたのに、ぼくはあとを追うこともしようとせず、固めた握り拳のように座席から身動きせずにいるうち、種々の光を反射してギラついたブルゾンは人混みに紛れてしまって、車が再び動きだした。まだマンションには程遠いはずで、普段の母ならこんなところまで来ないだろうし、何よりぼく自身、母には死ぬつもりも失踪するつもりもないと高を括っていたのに、目立つにせよ市販品に過ぎない外套は容易にぼくを動揺させて、ぼくの情緒は、真似事には対処できても本気には対処できない程度に脆弱だったのだ。

他方で自己を取り繕うだけの詭弁は既に完成していて、ぼくは母を見捨てるなら今しかないと信じ込もうとしていて、畢竟この世の中は、逃げようと思えばどこまででも逃げられるのだろうし、どれほどの無様さも正当化してくれる理屈が必ず見つかるのだろうし、そんな世界だから死にたかったはずなのに、そんな世界だから生かしてもらえている。

ぼくは今なお来夏のことを最優先に考えているはずで、彼女をぼく自身から解放する心づもりも変わっていないのだけど、計画の大幅な変更は避けられないのかもしれない。ぼくは電灯のスイッチを切るようにパチッと別れて死にたかったけど、それが無理だとわかったからには時間をかけて、蛍光灯の寿命を待ち望むように、じっくりと消えていくしかないようだ。このまま自分でも何がしたいのかわからないような愚行を重ねていれば、そのうち取り返しのつかない過ちにたどりつけるかもしれなくて、そうすれば、そうすれば、ぼくは来夏と別れる決意と、死ぬ決意を固めて実行できるかもしれないし、そうでなくと

も、やがてぼくがレイのようになれば来夏だって手を差し伸べなくなってくれるだろう。母を見捨てた話だって、それ単体なら来夏はぼくと一緒に喜んでくれるだろうけど、ぼくが堕落の足がかりにすれば、いずれ彼女も後悔するようになるはずで、ああでも、それはやっぱり来夏を傷付けることになってしまって、傷付ける、傷付ける、そう、ぼくはまず、来夏を傷付けることに対してもっと素直にならなくちゃいけない。

そういう、等身大の覚悟をしているうちに車はマンションに着いて、ぼくは入り口で見上げずに帰宅したのだけど、リビングにたどりつくと、相変わらず開け放されている扉の向こうから寝息が聞こえてきて、足音が立つのもかまわずに寝室に立ち入って見てみると、母が平和そのものの表情で眠っていて、ぼくは喉が鳴るほど強かに息を吐きながら一気に噴き上がってきたあらゆる感情を整理しようとしたけどできなくて、思わず彼女の首元まで伸びた両腕を慌てて引き戻すのが精一杯だった。

母の深い眠りを表わしているかのように柔らかい薄闇の中、ぼくは『リマインド』でレイに向けていたのと同じ目付きで母を見下ろしていて、その視線は外気より遙かに冷えていたはずだけど、しばらくして目の裏から水が垂れてきて、それが、病的に熱かった。少しでも安堵しているなんてことはないはずだけど、それ以外に涙の理由に関する説明は見出せなくて、ぼくは二ヶ月前に見た母の笑顔を、物心ついてから一番優しく見えたあの笑顔を思い出していて、ぼくはもしかしたら、ぼくを殴って、ぼくに救いを求めて、死なずにいてくれて、ぼくを許してくれる母に感謝しなければならないのかもしれない。

あの日ぼくの行き場を確保してくれていた、トラウマだらけの家と母と、いつまでもいつまでも平穏に順行してくれるこの世界を、ぼくは讃えこそすれ、恨む筋合いなんてどこにもないのかもしれなくて、来夏、神様、こんなことを考えているぼくを、考えることをやめられないぼくを、今すぐ殺してください。

リビングへ戻って母のトートバッグから財布を取り出し、自分の財布と並べて床に置いた。外套を脱いで正座して、決まった手順があるかのように整然とした手つきで母の財布から万札を抜いて、自分の財布に入れて、自分の財布からレイの万札を抜いて、母の財布に入れる。何度も繰り返す。穴を掘って埋め直すだけの簡単な刑罰。そんな作業を死ぬまで繰り返す。そんな人生を死んでからも永遠に繰り返す。

僅かに差し込む街灯に照らされ、かさぶたがとれて白くなり始めた手首の傷が晒されて、それをみとめた瞬間にアルコールで灼けた喉が勝手に「ごめんねえ」と鳴いて、誰に向けられた謝罪であるかなんてはっきりしているのに、ぼくはこの期に及んでなおそれが来夏

とか母とかレイとか、もしくは世界の全ての事物に宛てられているかのように、懸命に錯覚しようとしている。